兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

兵庫県文化財調査報告書　第85冊

永久保存（10－10）

長　礒　遺　跡

—満願寺川災害復旧助成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成３年３月

兵庫県教育委員会

正　誤　表

誤	正
3頁　2行目（上から） 柱穴の立ち割り等	柱穴の断ち割り等
8頁　2行目（上から） 殿原辻井遺跡の5遺跡	殿原辻井遺跡の4遺跡
10頁　2行目（下から） 現代見られるような	現在見られるような

長　礒　遺　跡

—満願寺川災害復旧助成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成３年３月

兵庫県教育委員会

例　　言

1．本報告書は兵庫県加西市殿原町長礒に位置する長礒遺跡の調査報告書である。

2．発掘調査は兵庫県社土木事務所による満願寺川災害復旧助成工事に伴って、昭和63年から平成２年に実施したものである。

3．現地調査は吉識雅仁・岸本一宏・村上賢治・山田清朝が担当し、昭和63・平成元年にまたがり４回に分けて実施した。

4．整理調査は吉識が主となり、嘱託員の補助を受けて、平成２年に実施した。

5．現地・整理調査等の発掘調査に係る経費は全て兵庫県社土木事務所が負担した。

6．遺構の実測は細川祐三・村上昌代の補助を受け、調査員が実施した。遺物の実測は吉本佳恵・長浜幸子・本岡雅子が実施し、岸本がチェックして実測図を作成した。

7．遺構・遺物図の浄書は吉本・長浜・本岡が行った。

8．遺構写真の撮影は調査員が実施したが、遺物の撮影は㈱サンスタジオに依頼した。

9．本書に使用した標高は兵庫県社土木事務所が設置した工事用のＢ.Ｍ.から引用したものであり、方位は座標北を使用している。

10．本書に使用した挿図の内、第４図は国土地理院発行の1／25000の地図を利用して作成したものであり、図版第一の航空写真は国土地理院撮影のものを使用した。

11．原稿の執筆分担は以下の通りであるが、編集は吉識が担当した。尚、編集段階で、必要に応じ、吉識が修正した。

　吉識　雅仁　　第１・２・５章、第３章第１節
　村上　賢治　　第３章第２節
　岸本　一宏　　第３章第３節、第４章

12．本書に掲載した記録・遺物はすべて兵庫県埋蔵文化財調査事務所において保管・管理している。

13．現地調査及び整理調査に関しては、兵庫県社土木事務所、加西市教育委員会の立花　聡、森　幸三、永井信弘氏等関係各機関の多大なる協力を得た。ここに謝意を表します。

本　文　目　次

第1章　はじめに

第1節　調査に至る経過 …… 1

第2節　調査の経過と体制 …… 2

第2章　遺跡の環境

第1節　地理的環境 …… 5

第2節　歴史的環境 …… 7

第3章　遺　構

第1節　調査区の概要 …… 13

第2節　北地区の遺構 …… 19

第3節　南地区の遺構 …… 24

第4章　遺　物

第1節　土　器 …… 29

第5章　まとめ

第1節　まとめ …… 33

挿　図　目　次

第１図　調査区設定図 …… 2
第２図　在田盆地南半の等高線図 …… 6
第３図　調査区北側表採石器 …… 7
第４図　位置と周辺の遺跡 …… 11
第５図　調査区全体図 …… 14
第６図　北地区全体図 …… 15・16
第７図　土層断面図 …… 17・18
第８図　建物址１ …… 20
第９図　土壙１ …… 21
第10図　土壙２ …… 21
第11図　溝１～４溝土層断面図 …… 23
第12図　南地区全体図 …… 25～26
第13図　建物址２ …… 27
第14図　建物址３ …… 28
第15図　建物址１出土土器 …… 30
第16図　建物址３・溝２出土土器 …… 32

図　版　目　次

図版第一　遺跡航空写真
図版第二　遺構　上）北地区全景
　　下）建物址１
図版第三　遺構　上）溝１～３
　　下）溝２土層堆積状況
図版第四　遺構　上）南地区全景
　　下）建物址２
図版第五　遺構　上）建物址３
　　下）南地区北端遺構群
図版第六　遺物　建物址１出土土器
図版第七　遺物　上）建物址１出土土器
　　下）建物址３・溝２出土土器

第1章　はじめに

第1節　調査に至る経過

遺跡の位置する加西市は、兵庫県のほぼ中央、播磨の内陸部に位置する人口約5万の地方都市である。昭和42年に加西郡内の町が合併し誕生した市で、近年までは北条町を中心とした企業城下町といった側面と、周辺地域の農業を中心とする側面を合わせ持って発達して来たが、近年北条町は大手スーパーの進出や市域の整備が進められ、その姿を変貌しつつある。また周辺地域では工業団地の誘致等の開発が進められるとともに、水田域では農業基盤整備事業やそれに合わせた諸事業が積極的に行われて、かつての農村景観は大きく変化しつつある。今回、兵庫県社土木事務所（以下社土木）が計画した河川改修工事もこうした整備事業と関連したもので、社土木による災害復旧工事と兵庫県社土地改良事務所による農業基盤整備事業に合わせて実施しようとするものである。

市域を流れる河川は加古川の支流である万願寺川と、その支流である若井川、普光寺川、下里川等であるが、いずれも中小の河川で、治水対策は遅れていた。それが昭和62年7月14日から19日にかけて降り続いた雨で、堤防が決壊したり、堤防が大きく抉られる等の被害が出て、流域の田畑が冠水する等の被害が出た。

そこで社土木は昭和63年度から「河川災害復旧助成事業」として、市全域の河川の改修を計画し、計画予定地内の埋蔵文化財について兵庫県教育委員会（以下県教委）に照会があった。照会を受けた県教委では計画地が河川沿いの地域であるものの、分布調査が未実施の地域であることから、分布調査が必要と判断し、社土木と協議して、昭和63年1月6日から同月8日に分布調査を行った。その結果、普光寺川流域で4地点、万願寺川流域で3地点、若井川流域で2地点、南村川流域で2地点の計11地点で遺物の散布が認められ、県教委は社土木に結果を回答するとともにその取扱いについて協議した。そこで工事の性格が災害復旧であることから、急遽、確認調査を行う事で合意し、県教委は11地点について、昭和63年2月8日から3月5日にわたって確認調査を実施した。ただ用地問題が残る本遺跡の南半部については、確認調査は実施し得ず、北半部の調査結果により、協議することとなった。

この調査で、遺跡の存在が確実となり、北半部は全面にわたる調査が必要となった。そこで社土木と協議したが、工事の性格から調査を急ぐことになり、昭和63年6月から実施した。また南半部についても確認調査が必要となったが、用地問題が残っており、北半部の全面調査時にも確認調査は実施し得なかった。そこで用地問題が一応の決着をみた11月に調査を実施し、南半部にも遺跡が広がっていることを確認し、平成元年3月に全面にわたる調査を実施した。

第２節　調査の経過と体制

１．確認調査

河川災害復旧工事に伴う確認調査は昭和63年２月８日から３月５日にかけて、11ケ所の散布地について行ったが、その内、本遺跡の確認調査は２月25・26日の２日間で行った。当初は南北約50m、東西約15mの範囲に、２m方角のグリッドを１ケ所だけ設定して行う予定となっていたが、その立地から見て、遺跡の存在が予想されたため、グリッド２ケ所とトレンチ１本を設けて実施した。その結果、内部に弥生土器等を含む溝状遺構が確認され、遺跡の存在が明らかとなった。また立地から見て、遺跡がさらに南に広がる可能性が高く、その部分の確認調査も必要と判断された。

調査の体制

調査主体　　兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

調査担当　　主　　任　　吉識雅仁

技術職員　　山田清朝

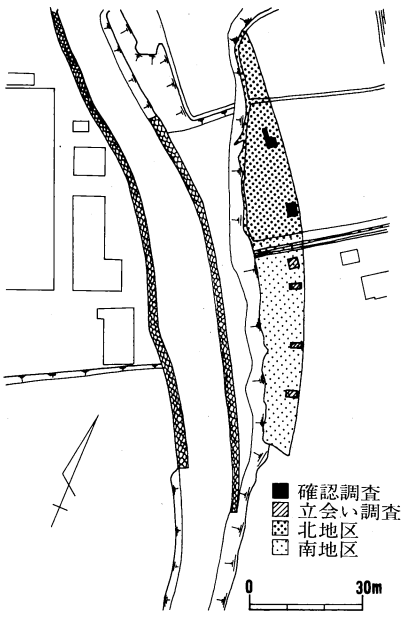
補 助 員　　細川祐三

２．北地区の調査経過と体制

確認調査で遺跡存在が明らかとなり、昭和63年６月７日～６月22日の間で、南北約55m・東西約15m、面積約550㎡の範囲の全面にわたる調査を行った。ただ調査範囲が狭い上、確認調査で遺構面より上層は水田に伴う床土層であることが判明していることから、調査区内には土層観察用の畦畔は設けなかった。

調査の実施方法は、遺物包含層が確認されていないことから、遺構面まで機械によって掘り下げることにし、遺構面検出・遺構掘削を人力によって行うことにした。また調査区内の測量は河川改修計画のセンター杭№.107と109を結ぶ線を基準とすることにした。ただ機械掘削の実施にあたっては、地権者の社土木への要望で、現耕作土は床土と分けて掘削した。

機械掘削終了後、調査区周囲に遺構面下の土層確認と排水を兼ねたトレンチを掘り、その後に遺構検出を行った。そこで検出された遺構については、必要なものは検出状況の写真撮影・実測作業の後、掘り下げたが、溝等について



第１図　調査区設定図

は、土層観察用の畦畔を設けて、掘り下げた。

遺構掘削終了後、調査区全体の写真撮影を行い、実測図を作成し、柱穴の立ち割り等のチェック作業を行って、調査を終了した。

調査の体制

調査主体　兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

調査担当　主　任　吉識雅仁
技術職員　村上賢治
補助員　細川祐三　田中　騰
事務員　村上昌代
整理作業員　伊藤博子

3．立会い調査

確認調査、北地区の調査を通じ、遺跡は南に広がる可能性が高く、南地区についても確認調査が必要と判断されていたが、用地問題から調査には掛かれないでいた。ようやく昭和63年10月に社土木から用地問題が解決したとの連絡を受けたが、南地区も含めて工事が発注されていたため、調査は急を要することとなった。そこで社土木と協議し、社土木側が経費を直接負担し、県教委が職員を派遣するという変則的な形で、調査を実施することになった。

調査は調査区が工場用地であることから機械掘削によるトレンチ調査とし、南北約120m・東西約7mの範囲にトレンチを7ケ所設定して、昭和63年11月14・15日の2日間で実施した。調査にあたっては、北地区の調査で遺構が確認された黄褐色シルト層まで機械掘削し、そこで遺構の検出作業を行い、遺構の確認出来ないトレンチについてはさらに下層に掘り下げ、遺構の確認作業を行うことにした。

調査の結果、今回の調査区の北半部で柱穴・溝等が検出され、遺跡が北地区から続いて来ることが明白となった。

調査担当　主　任　吉識雅仁
技術職員　村上賢治

4．南地区の調査経過と体制

立会い調査によって遺構が確認されたため、先の全面調査区を「北地区」、今回の調査区を「南地区」として調査を実施した。

調査範囲は南北約60m・東西約12m、面積約670㎡であり、調査の実施方法は基本的には北地区と同様とした。ただ測量時の基本杭は、北地区で工事が実施されていたため、北地区と同様にはできず、河川工事のセンター杭№.104に直交するラインを基準とした。そして北地区とは

調査終了後に図上で合わせることとした。

調査は平成元年３月16日、遺構検出面まで機械掘削することから開始し、その後に人力による遺構検出と遺構掘削を行った。検出された遺構については掘削後に写真撮影と実測作業を行った後、半截してチェックの作業を行い、現地での作業は平成元年３月30日に終了した。

調査の体制

調査主体　兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

調査担当　主　任　吉識雅仁

技術職員　岸本一宏

補助員　細川祐三

５．整理調査

現地調査は兵庫県教育委員会社会教育・文化財課の手で行ったが、平成元年度に社会教育文化財課から兵庫県埋蔵文化財調査事務所が地方機関として独立し、本遺跡の出土遺物・記録類は調査事務所に引き継がれたため、整理調査は調査事務所で行った。

昭和63年から平成元年にかけての４回にわたる調査で出土した遺物・遺構についての整理調査は平成２年度から開始し、報告書刊行までの全ての整理作業を単年度で終了した。４回の調査で出土した遺物は僅かであったことから、遺物整理にあたっては可能な限り、整理対象とすることとし、特に復元・実測作業ではできるだけその作業を試みた。こうした方針で臨んだが、それでも実測できた遺物は24点であり、完形に復元できた遺物は全く無かった。

遺構の整理作業は、北・南地区にわけて実施した２回の全面調査で検出された遺構を中心に行い、まず全体図の作成から始め、個別の遺構の整理へと進めた。個別の遺構の整理では、検出された遺構が少ないため、可能な限り検討することにして臨み、特に北地区の柱穴群と南地区北端の柱穴群から建物址等の復元を試みた。

整理作業はほぼ９月で終了し、10月に報告書の印刷を発注した。

調査の体制

調査主体　兵庫県埋蔵文化財調査事務所

調査担当　主　査　吉識雅仁

技術職員　岸本一宏　村上賢治

嘱託員　吉本佳恵　長浜幸子　本岡雅子　香川フジ子　西野淳子

杉本淳子　石野照代

第2章　遺跡の環境

第1節　地理的環境

加西市は加古川の支流である満願寺川の流域に位置し、気候は比較的温暖で、風水害も少ない地域である。しかし年間降水量が少ない上、市内の河川はいずれも中小の河川であることから、恒常的な水不足が言われている地域である。

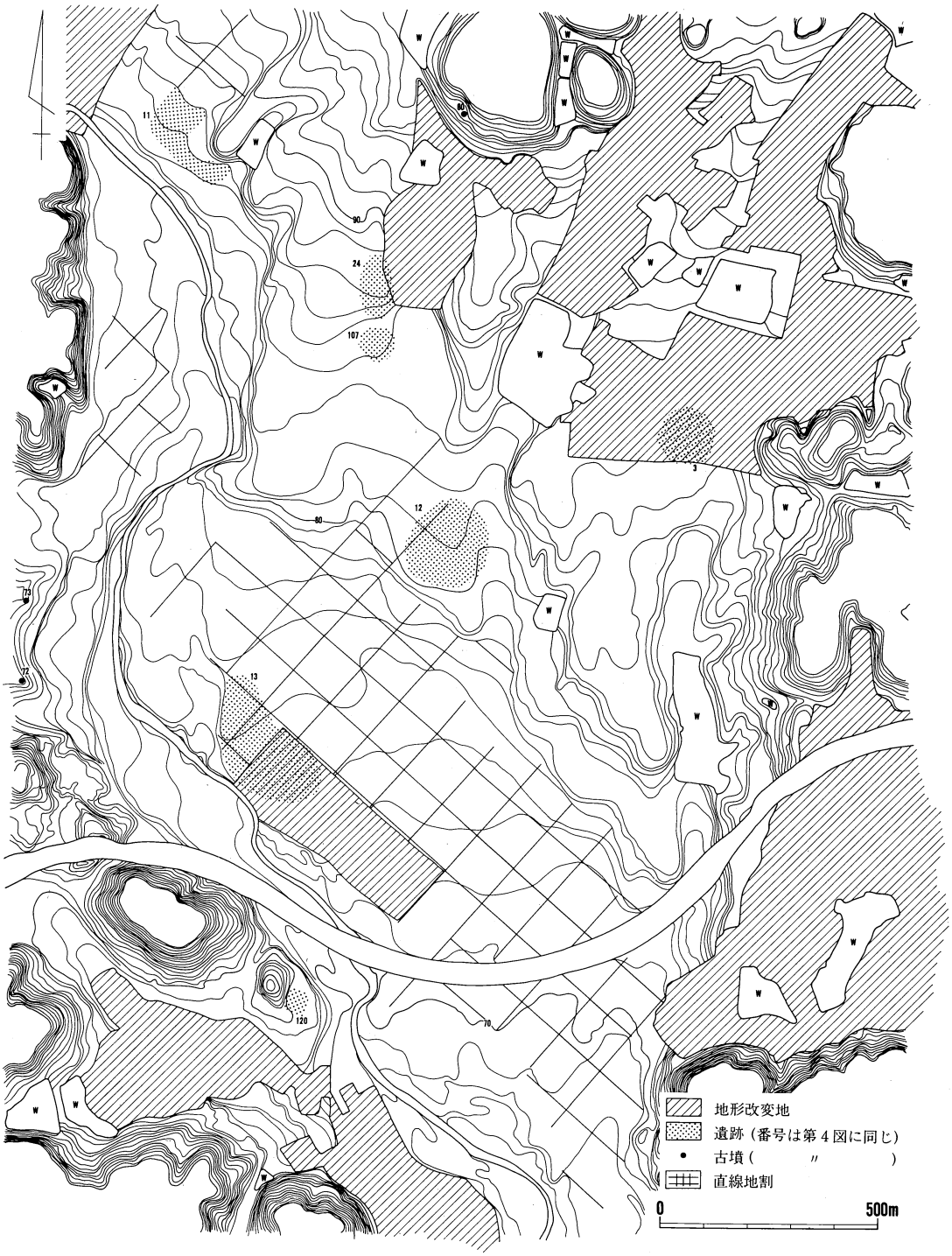
市域は「加西盆地」と呼ばれ、中国山地から派生して来る山地や丘陵・洪積世段丘に囲まれた盆地である。盆地内部の地形は主として沖積低地・沖積世段丘・洪積世段丘・丘陵・山地で構成されている。盆地を囲む山地や盆地内の独立丘陵の一部は地質的には流紋岩で形成され、高室町背後の山地や善坊山付近の山地は凝灰岩質流紋岩からなり、古墳時代以降の石材産地となっている。平野部は河川流域に広がるが山地・丘陵等に分断されて、7地域の小盆地にまとめられる。本遺跡はその内の満願寺川上流域の「在田盆地」と呼ばれる小盆地に位置している。

「在田盆地」は北・西・南の三方を中国山地から派生してくる比較的急峻な山地に囲まれ、東側は洪積世段丘や独立丘陵によって遮られて、僅かに満願寺川が中流域に流れ出る南東部で、下流側に開口している。盆地内の地形は段丘・沖積地で構成されるが、上野町付近で、上流側と下流側に分けることができる。上流側は満願寺川と支流の若井川・芥田川・佐谷川によって形成された谷底平野からなる地域である。

下流側では、ほぼ東流して来た満願寺川が上野町付近で段丘地形に遮られて大きく南に蛇行し、段丘の発達した盆地中央を迂回するように、盆地の西端から南端を流下している。

地形的には段丘・沖積低地・氾濫原・人工改変地からなるが、大部分は段丘であり、現氾濫原・沖積低地は満願寺川に沿って、僅かに見られる程度である。段丘は満願寺川の右岸では山麓に僅かに見られる程度であるが、左岸では顕著に発達しており、3段が認められる。

段丘Ⅰは盆地内の堆積面としては最も古いもので、満願寺川の左岸では標高約78～100mに分布し、現在の中富町から北町にかけて、北西－南東方向に明瞭な高さ約6mの段丘崖が見られる。段丘Ⅱは満願寺川左岸では標高約74～83mに分布する。段丘崖は高さ約3mで、中富町から殿原町上所までは北西－南東方向、そこから上野町までは南北方向に続く明瞭な段丘崖が見られる。段丘Ⅲは満願寺川によって形成された扇状地が、河川の浸食で最も新しく段丘化したもので、最も広く認められる段丘である。段丘崖は河川に沿って両岸に認められ、段丘面上はほぼ北西－南東方向に傾斜しているが、微起伏が認められ、河川沿いが高くなっている。本遺跡はこの河川沿いの微高地上、段丘面の淵に位置している。また段丘面上には埋没河道の痕跡が認められ、遺跡北側の谷部もそうした埋没河道である。



第２図　在田盆地南半の等高線図

第２節　歴史的環境

本遺跡の位置する在田盆地では、昭和47年以前に兵庫県教育委員会が実施した分布調査で約14ケ所の遺跡が上げられているが、平野部はほとんど遺跡が知られず、僅かに殿原廃寺だけが知られているに過ぎなかった。しかし最近の農業基盤整備事業に伴う発掘調査等で、平野部における遺跡数は約25ケ所に増加し、ようやく盆地内部での中世以前の状態がある程度把握できる状態に来ている。そこで最近の発掘調査の成果と従来の分布調査による見解とを合わせ、盆地内における遺跡立地の変化から、居住空間の変化、つまり生産領域・生活圏の広がりといったものを古代までに限って見てみたい。ただし分布調査によって示されている個々の遺跡の見解については再検討が必要なものも認められるが、ここでは敢えて問わず、発掘調査の成果についても、報告書等に示されている成果を尊重することとした。

１．旧石器・縄文時代

旧石器時代の遺跡は、加西盆地全体では逆池・亀ノ倉・善坊池遺跡の３遺跡が知られているが、いずれの遺跡も洪積世の段丘上に位置している。在田盆地内では従来知られていなかったが、本遺跡で表面採集された遺物の中にチャート製の石器があり、旧石器時代に遡るものと見られるが、かなり磨滅していることから、いずこからか運ばれてきたものと思われる。

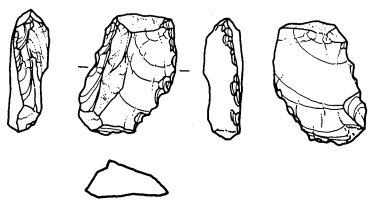
縄文時代の遺跡は本盆地内の満久遺跡の他、加西盆地全体では逆池・有馬・薬師谷遺跡等がある。有馬遺跡を除く３遺跡は洪積世の段丘上に展開するが、有馬遺跡は沖積地内の微高地に展開している。ただ有馬遺跡では落とし穴状の土壙が検出されているだけであり、生産領域における遺跡と捉えられる。

このように狩猟・採集を経済基盤とする旧石器・縄文時代は洪積世の段丘上を中心に展開されている。これは洪積世段丘上が狩猟・採集という生産活動に適した地形であったためと考えられ、洪積世段丘に入り込んだ開析谷は生産領域として利用され、そこに面した段丘上は飲料水の確保が可能な所を選んで、居住域として利用されたものと思われる。

２．弥生時代～古墳時代前期

稲作を経済基盤の中心とするこの時期には、遺跡立地は前代に比べると大きく変化し、水田耕作に適した沖積地が生産領域に選ばれ、居住域はそこに面した所に位置するようになる。

本盆地を含めた加西盆地全体では、狩猟・採集から稲作を生産手段の中心とした生活文化となる弥生時代前期の遺跡は知られておらず、そうした遺跡が見られるようになるのは、他地域で遺跡が爆発的に増加するといわれる中期以降であり、本盆地内では中期前半以降である。



第３図　調査区北側表採石器

この時期の遺跡としては加西盆地全体では約16遺跡が知られているが、在田盆地内では本遺跡の他、伏田遺跡・朝垣遺跡・中富遺跡・殿原辻井遺跡の5遺跡がある。5遺跡の内、弥生時代中期前半以降の中富遺跡は段丘Ⅲ上の微高地に位置している。弥生時代後期から古墳時代前期の本遺跡・伏田遺跡・朝垣遺跡・殿原辻井遺跡の立地は中期と変わらず段丘Ⅲ上の微高地や段丘Ⅲに面した段丘Ⅱ上であるが、遺跡分布は中期より上流側に大きく拡大している。当時の農業土木技術で水田化が可能な低地を求めて、上流側に生産領域を拡大していったようである。

このように弥生時代から古墳時代前期までは段丘Ⅱ上や段丘Ⅲ上の微高地を居住空間とした活動が続けられたようであるが、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての居住域の拡大は、当然生産領域の拡大に伴ったものであり、この時期に生産領域が拡大したようである。

またこの時期の遺跡は短期間で廃棄され、後の古墳時代中期以降にまで継続するものは、本盆地内には見られない。加西盆地全体でも弥生時代に集落が営みを始め、かなり長期にわたって集落活動を継続する遺跡は小谷遺跡だけである。こうした集落の短期間での廃棄という現象の起因する所は不明と言わざるを得ないが、古墳時代中期以降の生産領域の大幅な拡大もその一因として上げられる。また小谷遺跡の継続的な集落は逆の意味で、加西盆地では特徴的である。

3．古墳時代中期・後期

この時期の遺跡数は古墳時代前期以前の遺跡数と比較すると増加し、中期の伏田遺跡、後期の殿原北方遺跡・下川原遺跡・小西遺跡がある。遺跡の立地も大きく変化し、遺跡分布も満願寺川の上流域に拡大している。殿原北方遺跡は段丘Ⅱに面した段丘Ⅰ上に営まれており、集落が生産領域に面し、当時の農業土木技術で水田化が不可能な土地が生活空間として選択されたと仮定するなら、この時期に段丘Ⅱ上の浅い谷部か、あるいは段丘Ⅱ全体が生産領域として、水田化されたことが窺える。また下川原遺跡・小西遺跡は満願寺川の流域としては最も上流域に位置しており、特に小西遺跡は満願寺川が形成した沖積地の最も上流に当たる。小西遺跡付近で満願寺川は若井川と分かれるが、遺跡より上流域では若井川流域に僅かに沖積地が認められるだけである。おそらく小西遺跡は当時の技術力で水田化できる土地のほぼ限界付近に位置しているものと考えられる。

一方古墳は前期に属するものは本盆地内や加西盆地全体には見られず、中期に突如として出現する。本盆地南の北条盆地では全長109mの前方後円墳である玉丘古墳、径45mのマンジュウ古墳等を中心とした、5世紀代の大型の前方後円墳・円墳等からなる玉丘古墳群が築かれており、加西盆地を支配した豪族の奥津城といった景観を呈している。古墳群から出土する遺物には初期須恵器を持つものが見られ、同じ初期須恵器を出土し、弥生時代後期から継続する集落である小谷遺跡との関連が今後注目される。

こうした北条盆地に対し、在田盆地に古墳が出現するのは後期になってからであり、しかも

大型の古墳は見られない。皇塚古墳を除くと、墳形は小型の円墳がほとんどで、内部主体に横穴式石室を採用し、群集して築かれている。

古墳あるいは古墳群の立地は段丘Ⅰ上に位置するもの（鴨谷古墳・鴨谷大塚古墳・ヤクチ古墳群）、山麓に位置するもの（大谷山古墳群・穴塚古墳）、山腹に位置するもの（中後山古墳群・東山古墳群・別所古墳群）、山頂に位置するもの（向池山古墳・皇塚古墳）が見られる。古墳の立地は古墳に埋葬された被葬者が支配した生産・居住の場を望観でき、さらにそうした生活の場から未開発地域に踏み込んだ地域に当たる。したがって古墳の立地する場所は当時では未開発域であり、当時の既開発域は古墳・古墳群の立地する場所より下の地域であった。

これらの遺跡・古墳の分布状況や立地から、弥生時代から続く満願寺川を遡っての生産領域の拡大は古墳時代中期以降も続けられるとともに、古墳時代後期にはほぼ限界に達したものと思われる。また古墳群の分布から古墳時代後期には満願寺川流域から支流である芥田川・佐谷川の形成した谷底平野、中後山古墳群下の谷底平野等の開発も行われたものと思われる。この時期に満願寺川・若井川の最上流部以外の沖積地の開発はほぼ終了し、別所古墳群の位置から段丘Ⅰの開析谷の開発も行われたようである。またこうした沖積地における水田開発が行われる一方、新たに段丘Ⅱ上においても開発が始められ、古墳時代後期には少なくとも段丘Ⅱ上の一部は水田化されていたものと考えられる。

このように、この時期の水田開発は盆地北半の沖積地と段丘Ⅱ上や谷底平野に及び、前代の水田開発とは飛躍的な発展を遂げている。おそらくそこには中期を通じての大型古墳の築造で培われた土木技術が生かされたのであろう。

4．古　代

藤原期以降平安時代までを古代として扱ったが、藤原期の集落遺跡は明確ではなく、奈良時代以降が中心となる。本盆地内のこの時期の遺跡としては満久遺跡・殿原辻井遺跡・殿原北方遺跡・朝垣遺跡・小西遺跡・女切遺跡があるが、女切遺跡を除いては前代の遺跡立地とは大きく変化していない。僅かに段丘Ⅰ上に満久遺跡が営まれているが、遺物の出土だけで、遺跡としての性格は不明である。平安時代の女切遺跡は満願寺川のほぼ源流に近い山間部に位置しているが、満願寺との関係が考えられる遺跡である。

加西盆地では古代の寺院址が多く見られ、比較的広い平野部単位に建立されている。満願寺川下流域には繁昌廃寺、北条盆地には吸谷廃寺、下里盆地には野条廃寺等が知らており、本盆地内にも殿原廃寺が知られている。殿原廃寺は藤原期から建立が開始され、平安時代まで存続するようであるが、伽藍配置等は明らかになっていない。ただ古墳時代後期の集落、殿原北方遺跡とほぼ重なって位置している。当時の寺院は、水田域と居住領域との境付近に占地されたものと考えられることから、段丘Ⅰ上はまだ未開発のままであり、僅かに集落の近辺に畑作領域が設けられていた程度であろう。前代まで続いてきた意欲的な水田開発は、すでに前代に可

能な地域の開発は終了し、この時期には新たな土木技術の開発がない限り水田化出来ない場所を残すだけとなり、前代のような漸進的な開発は不可能になったものと思われる。

視点を変えて歴史地理学的な見地からみた場合、盆地内の河川左岸域には明確に約N50° Wの方位を持つ条里形地割りが遺存している。この方位に近い方向性を持つ条里形地割りはほぼ満願寺川中・上流域や北条盆地を含む下里川流域に分布していたようであるが、北条盆地と満願寺川中・上流域の一部以外は見られなくなっている。この条里形地割りは盆地内では段丘Ⅲ上に施工され、一部段丘Ⅱ上に延長された形で及んでいる。また殿原廃寺周辺の段丘Ⅱ上にもほぼ正方位の方形地割り状の痕跡が見出せるが、方形地割りとして抽出することは出来なかった。一般に異条里は新しいと言われているが、この条里形地割りが何時成立したかは不明である。ただその分布は古墳時代後期以前の生産領域に限定されている。段丘Ⅱ上は遺跡立地から見て、何らかの開発が及んでいた地域であるが、当時の技術力でも方形地割りの施工というような大規模な水田化は困難な地域であり、水田としてよりは畑として利用されていた可能性もある。

5．まとめ

以上のように、本盆地内では弥生時代中期後半に始まった、主として水田耕作に経済基盤を持つ集落の営みは、弥生時代後期以降は満願寺川を遡る形で拡大され、古墳時代後期までには、段丘Ⅰ上を除く盆地内のほぼ全域に集落遺跡は展開している。集落形成は未墾地の開発、本村からの出作といった経過を経て行われることから、古墳時代後期以前には盆地内の沖積地は大部分が主たる生産基盤として水田化されたようである。前述した通り、それは巨大古墳を築造した古墳時代中期の土木技術を持って、初めて成し遂げられたものであろう。

古代には中央政府から再三墾田の奨励がなされているが、本盆地内の集落遺跡の立地といった点からは、その痕跡は明確にできなかった。おそらくそこでは新村を成立させるほどの大規模な開発はなかったのであろう。しかしこの時期の細々とした開発が古代末以降に成立する荘園支配体制の中で、新村の成立を見る下地となったものと思われる。

古代末に本盆地内には「在田荘」が成立し、鎌倉時代前半には「在田上荘」・「在田下荘」に分かれるが、盆地内の集落及び田畑は荘園支配体系の中に組み込まれる。その中で積極的な水田開発・生産領域の拡大がはかられたことは、満願寺川上流域の支流である若井川流域に高町遺跡が出現することや、満願寺川最上流域の谷合いでも遺物の出土が見られたこと等が具現している。そして中世末から近世初期には、現代見られるような在田盆地の景観が出来上がったものと思われる。

第４図　位置と周辺の遺跡

遺跡地名表

No.	遺跡名	時代
1	亀ノ倉遺跡	旧石器
2	逆池遺跡	旧石器・縄文
3	満久遺跡	縄文
4	有馬遺跡	縄文～室町
5	泉田遺跡	弥生～平安
6	河内向山遺跡	弥生
7	友谷遺跡	弥生
8	六ノ坪遺跡	弥生～奈良
9	森ノ下遺跡	弥生～中世
10	城山遺跡	弥生
11	朝垣遺跡	弥生～中世
12	殿原辻井遺跡	弥生～奈良
13	長礒遺跡	弥生
14	中富遺跡	弥生～中世
15	山枝遺跡	弥生～古墳
16	長塚遺跡	弥生
17	小谷遺跡	弥生～中世
18	長本遺跡	弥生～中世
19	大村遺跡	弥生～中世
20	伏田遺跡	弥生～古墳
21	池ノ下遺跡	古墳～中世
22	小西遺跡	古墳
23	下川原遺跡	古墳～室町
24	殿原北方遺跡	古墳～中世
25	有馬遺跡	縄文～室町
26	横田遺跡	奈良
27	東横田遺跡	
28	田中遺跡	平安
29	三子遺跡	平安
30	都染田中遺跡	中世
31	薬師谷遺跡	平安
32	旅所遺跡	中世
33	満久谷遺跡	弥生～中世
34	万所遺跡	中世
35	細谷遺跡	中世
36	高町遺跡	中世
37	城ノ越遺跡	中世
38	尾崎遺跡	中世
39	ジヤマ古墳	古墳（中）
40	東長本古墳	古墳（後）

No.	遺跡名	時代
41	笹塚古墳	古墳（中）
42	芝中古墳群	古墳（後）
43	小山古墳	古墳（中）
44	黒福古墳	古墳（中）
45	マンジュウ古墳	古墳（中）
46	逆古墳	古墳（中）
47	玉丘古墳	古墳（中）
48	玉丘古墳陪塚１号	古墳（中）
49	玉丘古墳陪塚２号	古墳（中）
50	クワンス塚古墳	古墳（中）
51	壇頭山古墳	古墳
52	実盛塚古墳	古墳（中）
53	南山古墳	古墳（後）
54	地蔵堂古墳	古墳（中）
55	北山古墳	古墳（中）
56	宮池古墳	古墳（後）
57	地蔵池古墳	古墳
58	浜津池古墳	古墳
59	稲荷古墳	古墳（後）
60	庚申山古墳	古墳
61	玉野寺山１号	古墳（後）
62	玉野寺山２号	古墳
63	宮ノ谷古墳	古墳
64	塚本古墳	古墳（後）
65	反田池古墳	古墳 平安
66	毘沙門古墳	古墳（後）
67	逆池古墳群	古墳（後）
68	亀山古墳	古墳（中）
69	奥谷山古墳	古墳
70	一本松古墳	古墳
71	坊主山古墳	古墳
72	鴨谷大塚古墳	古墳（後）
73	鴨谷古墳	古墳
74	中後山古墳群	古墳（後）
75	ヤクチ古墳群	古墳（後）
76	東山古墳群	古墳（後）
77	向池山古墳	古墳
78	大谷山古墳群	古墳（後）
79	穴塚古墳	古墳（後）
80	皇塚古墳	古墳

No.	遺跡名	時代
81	別所古墳群	古墳
82	島古墳	古墳
83	経塚古墳	古墳
84	桑ケ池上古墳群	古墳
85	まり塚古墳	古墳
86	荒神谷古墳群	古墳
87	明神山古墳群	古墳
88	西の垣内古墳	古墳
89	愛后山古墳	古墳
90	南条古墳	古墳
91	豊倉古墳	古墳
92	上宮木古墳	古墳
93	飯盛山古墳群	古墳（後）
94	開キ古墳	古墳（後）
95	円山古墳群	古墳（後）
96	石山古墳	古墳
97	石黒山古墳群	古墳（後）
98	保木山古墳群	古墳（後）
99	寺山古墳群	古墳（中後）
100	愛后山古墳群	古墳（後）
101	池田古墳	古墳
102	出屋敷１号墳	古墳（後）
103	出屋敷２号墳	古墳（後）
104	岸呂古墳群	古墳（後）
105	大村古墳	古墳（後）
106	東高室古墳	古墳（後）
107	殿原廃寺	藤原～平安
108	繁昌廃寺	藤原～平安
109	尼ケ池瓦窯址	藤原
110	山ノ脇瓦窯址	藤原
111	繁昌山ノ辻瓦窯址	藤原
112	天神山瓦窯址	藤原
113	新生一窯址	平安
114	野田窯址	古墳（後）
115	満久城址	室町
116	河内城址	室町
117	芥田城址	室町
118	小谷城址	室町
119	大年遺跡	中世
120	笹倉城址	室町

第3章　遺　　構

第1節　調査区の概要

前述した通り、遺跡の現地調査は遺跡範囲の確認や用地買収等の都合から、全面調査は調査区中央の農道によって分割して、2回に実施している。ただ整理調査では農道下で遺構が検出されなかったこともあり、農道南側の農業用水路によって「北地区」と「南地区」に分割して実施していることから、記述にあたっても整理調査における地区の呼称を用いることにする。

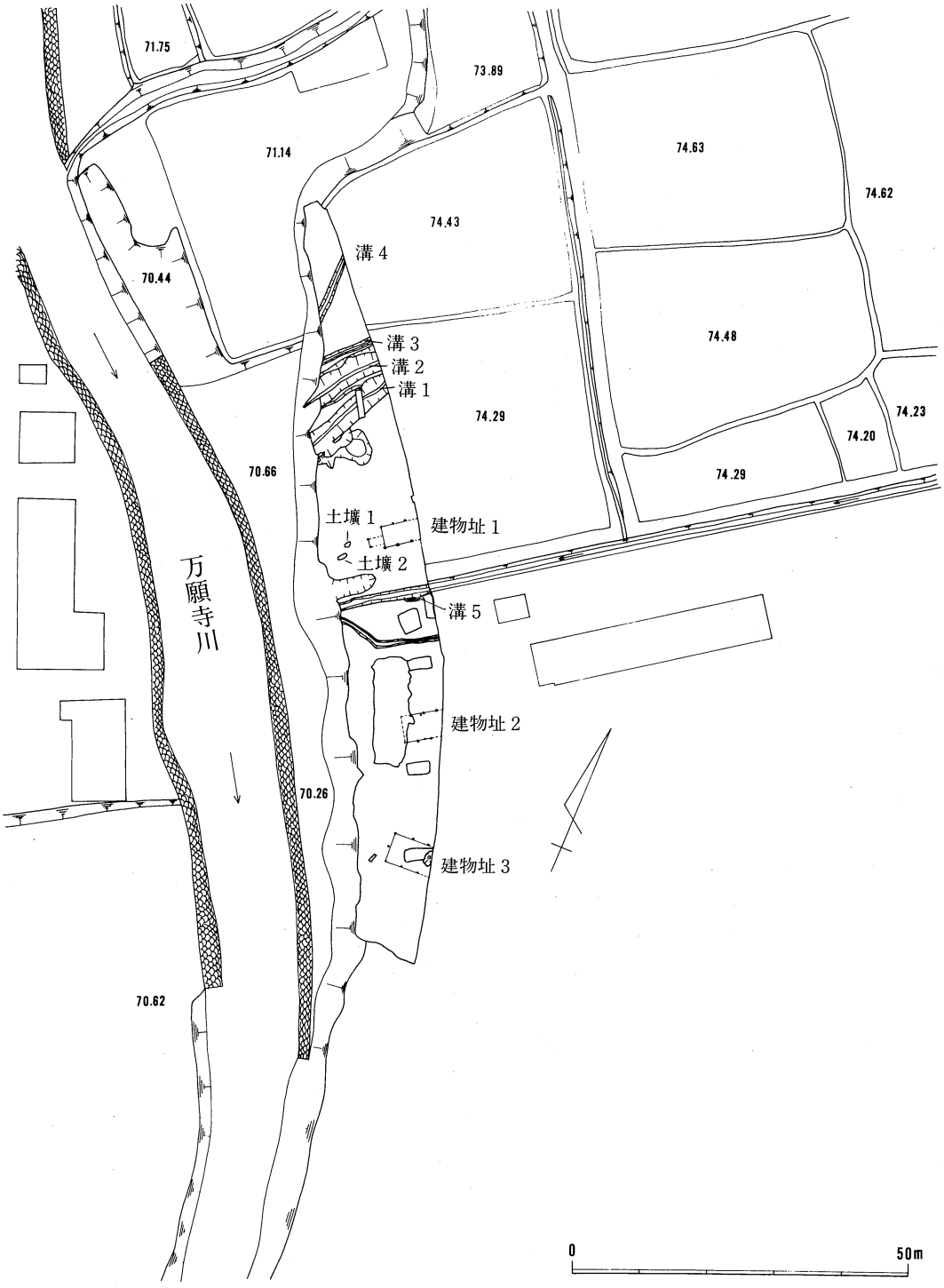
調査区は満願寺川の浸食作用によって形成された段丘端に位置し、調査区西・北端は段丘崖となっている。遺跡の眼下を満願寺川が段丘崖を削るように南流しており、調査区内の現水田面と河川沿いの氾濫原とは比高差にして約3.5～4.0m、遺構検出面からでも約3.5mを測る。また調査区の北側は、満願寺川の旧河道と思われる現殿原町集落付近から続く谷部となっている。段丘上にはこの旧河道沿いに微高地が認められ、本遺跡もその微高地の端に位置している。

調査区の調査前の土地利用は北地区と南地区で異なっていた。北地区は南端が農道であった他は2枚の水田として利用されており、北半の水田は標高約74.4m、南半の水田は標高約74.3mであった。南地区は大部分が工場用地であるが、調査区内は簡易のガレージとして利用されていた以外は、竹林となっていた。

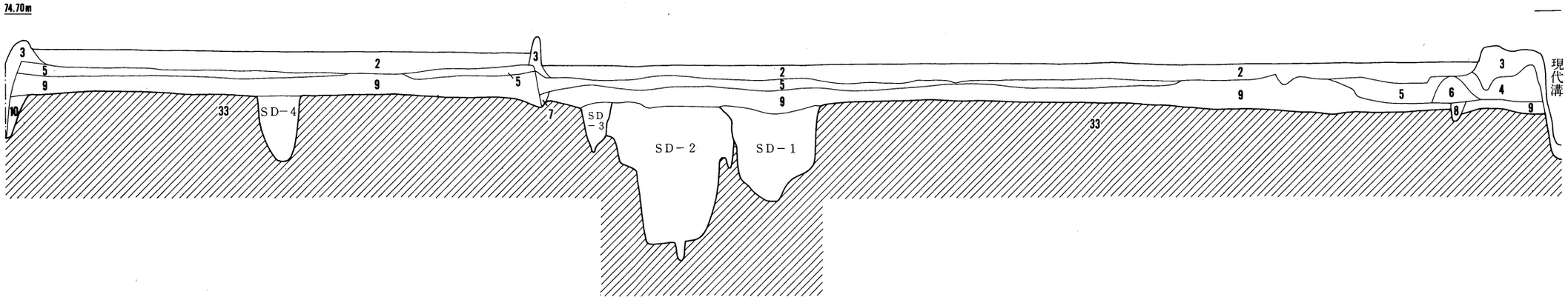
北地区と南地区ではこうした土地利用の違いがあるため、遺構検出面までの土層堆積状態は全く異なっていた。北地区の土層堆積状況は現耕土下に黄灰色や灰褐色を呈する旧耕土や床土層が認められ、床土層の直下が褐色のシルト質極細砂層であった。遺構検出面はこの層上であり、ほぼ一層で構成されていた。

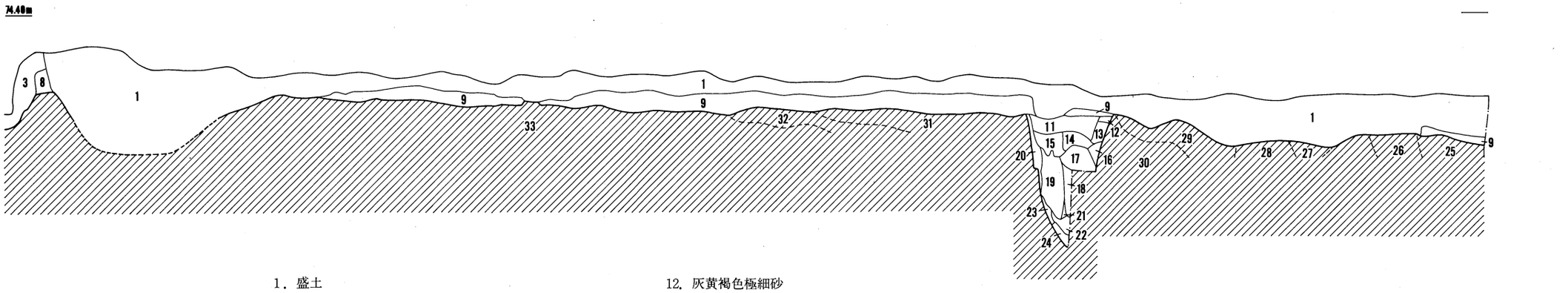
南地区では工場用地として造成される際に削平や撹乱を受けており、現耕土や床土は地区中央付近を残して削り取られ、地区の北端と南端は遺構検出面まで撹乱を受けていた。遺構検出面は地区中央付近までは北地区と同じ褐色のシルト質極細砂層上面であるが、南半は堆積状況から8層に分層でき、地区の北方から流入してきた自然堆積層上面であった。遺構検出面が工場用地造成時に削平・撹乱を受けていたり、遺構検出面が複雑であったこともあって、この地区の遺構検出は本来の遺構検出面から約10cm程度掘り下げて行った。

検出された遺構の詳細は以下に記述するが、遺構数は両地区合わせても建物址3棟、柵1列、柱穴40個、土壙2基、溝5本であり、分布状況も疎らであった。建物址・柵列・柱穴群は4地区に分かれて検出されており、検出数も少数であったことから建物址の復元は容易であった。溝の内、比較的巾広いものは北地区の北半に限って検出され、土壙は、北地区南半だけで検出されている。

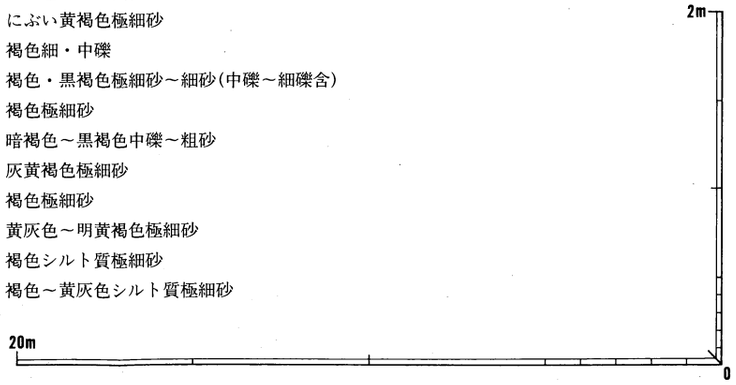

71.75
73.89
71.14
74.63
74.62
74.43
溝 4
70.44
溝 3
溝 2
溝 1
74.48
74.29
74.23
74.20
74.29
70.66
土壙 1
建物址 1
土壙 2
万願寺川
溝 5
建物址 2
70.26
建物址 3
70.62
0
50m

第５図　調査区全体図

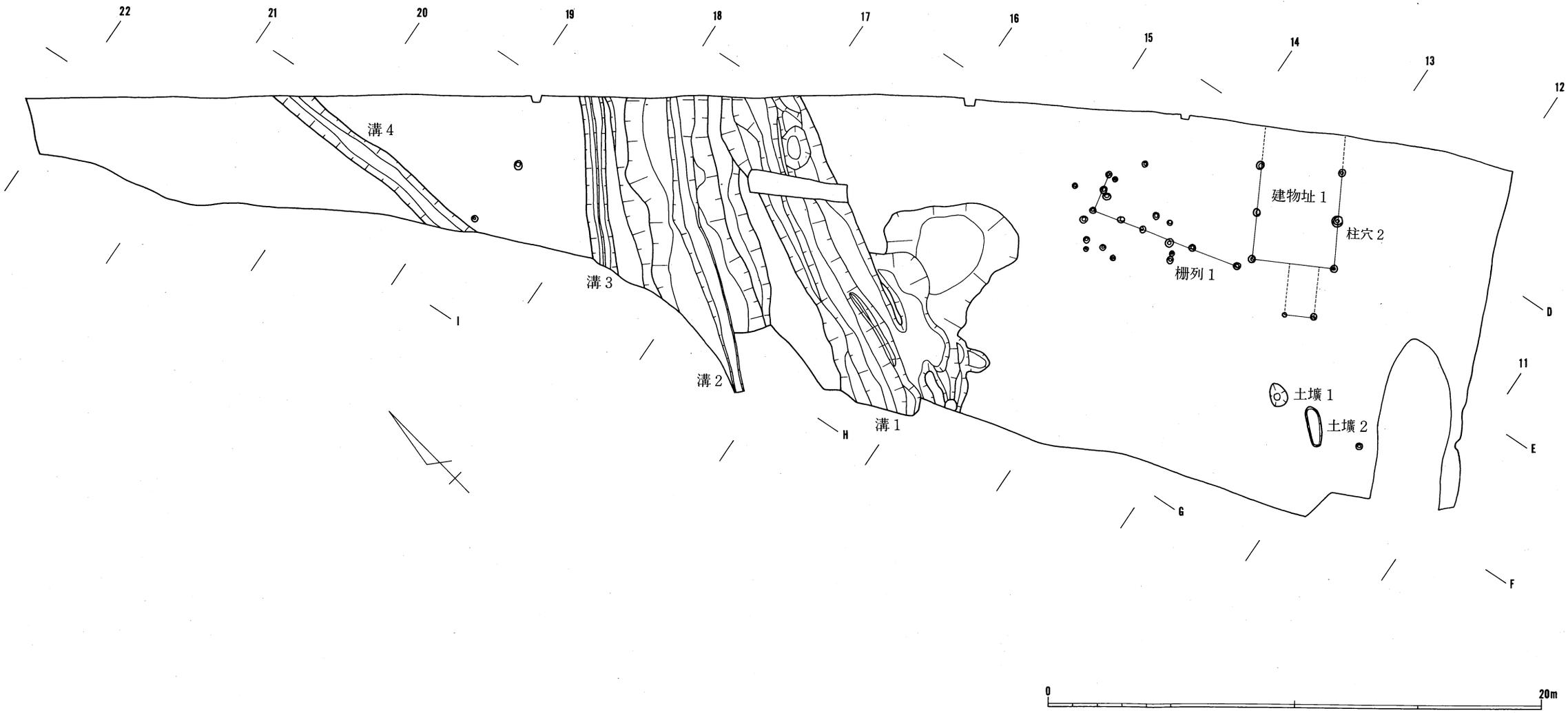




1．盛土
2．耕土
3．畦畔盛土
4．灰色シルト質極細砂
5．黄褐色シルト質極細砂
6．灰色シルト質極細砂
7．浅黄色シルト質極細砂
8．灰色シルト質極細砂
9．灰白色・浅黄色シルト質極細砂(床土)
10．明黄褐色シルト質極細砂
11．灰黄褐色極細砂
12．灰黄褐色極細砂
13．暗褐色細砂～極細砂
14．にぶい黄褐色シルト質極細砂
15．黒褐色極細砂
16．にぶい黄褐色極細砂
17．褐色シルト質極細砂
18．暗褐色中砂～極細砂
19．黒褐色シルト質極細砂
20．暗褐色中礫～極細砂
21．灰褐色粗粒シルト～極細砂
22．黒褐色粗粒シルト～極細砂
23．灰褐色シルト質極細砂
24．にぶい黄褐色極細砂
25．褐色細・中礫
26．褐色・黒褐色極細砂～細砂(中礫～細礫含)
27．褐色極細砂
28．暗褐色～黒褐色中礫～粗砂
29．灰黄褐色極細砂
30．褐色極細砂
31．黄灰色～明黄褐色極細砂
32．褐色シルト質極細砂
33．褐色～黄灰色シルト質極細砂



第6図　土層断面図


22
21
20
19
18
17
16
15
14
13
12
溝 4
溝 3
溝 2
溝 1
建物址 1
柱穴 2
柵列 1
土壙 1
土壙 2
I
H
G
F
E
D
11
0
20m

第 7 図　北地区全体図

第２節　北地区の遺構

遺構は褐色シルト質極細砂層を掘り込んで作られており、現在の耕土直下から遺構検出面までの深さは約20～30cmを測る。また褐色シルト質極細砂層の堆積は厚く、その下層は砂礫層となっており、遺構検出面以下では遺物の出土は認められなかった。

北地区で検出した遺構には建物址１棟・柵１列・柱穴群・土壙２基・溝４本があるが、遺構の分布状況は地区の北半と南半で異なっている。地区南半から南端では建物址・柵列・柱穴群・土壙が検出され、地区中央から北半では溝が検出されているだけで、柱穴等は検出されていない。おそらく地区中央の溝１・２が集落の西端を限るものと思われる。

検出された柱穴は約30個で、南半は数も少なく、柱の配置が規則的であることから１棟の建物址として捉えられた。北半は狭い範囲に密集しており、その性格は不明であるが、配置・柱間等から柵列１を復元している。他に１×１間の建物址に復元することが可能な柱穴群もあるが、配置に歪みが認められることから、建物址とすることは回避した。

２基の土壙は建物址の西側、遺跡の西端で検出されているが、性格は不明である。

４本の溝は地区の中央から北半で検出され、溝４だけが走行方向を異にするが、溝１～３は近接し、ほぼ並行して走行している。特に溝１・２は断面形状や規模が似通よることから、同一の溝の可能性もある。

建物址１（第８図、図版第二下）

地区南東部で検出された建物址で、検出できた部分では梁行１間、桁行２間であるが、桁行方向は柱間から見て、さらに東に延びる可能性もあり、桁行は２間以上の規模となる。

棟方位はＮ55°Ｅであり、柱間は桁行が約1.9m、梁行は約3.24mで、柱穴の掘り方は径約25～30cm、深さは約23～56cmである。

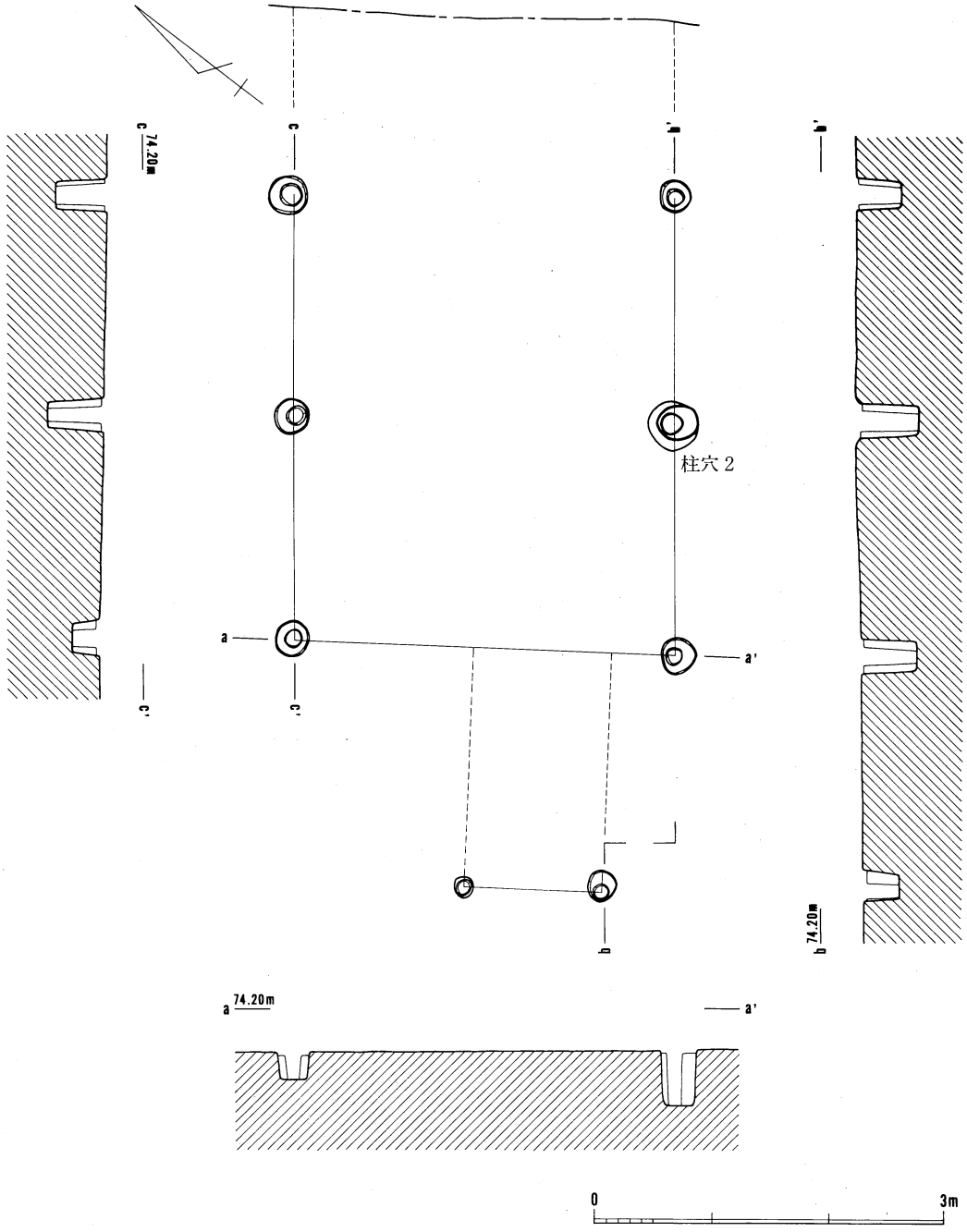
西妻外側には妻に並行する２個の柱穴が西妻から約2.1m離して設けられている。両柱穴の間隔は約1.2mを測り、両柱穴の掘り方は径約16・20cmと小さい。北側の柱穴と西妻とを直角に結ぶ線がほぼ妻の中央に当たることや、建物址の西側には他の柱穴が存在しないこと、方向も建物址に並行することから、両柱穴も建物址に付随した何らかの施設に伴う柱穴と捉えられる。

柱穴からは弥生土器が出土し、特に柱穴２の掘り方内からは壷（1～9）・甕（10～13）等が出土している。

この建物址は桁行方向に比べて梁行方向の柱間が広いこと、梁行が１間であることなどから、倉庫であった可能性が高いと思われる。その場合西妻に並行する２個の小柱穴は、梯子等を設置するために使用した柱穴と考えることができる。

柵列１（第７図）

建物址の北側で検出した柱穴列で、３間分の柱穴がほぼ等間隔で直線的に並び、北端で直角



第８図　建物址１

に東に折れ１間分が認められる。柱間は南北が約2.12m、東西が約1.6mで、柱穴の掘り方は径約25～30cm・深さ約25～46cmを測る。方位は約Ｎ20°Ｗで、建物址１とは方位を違えており、建物址に伴うかどうかは不明である。

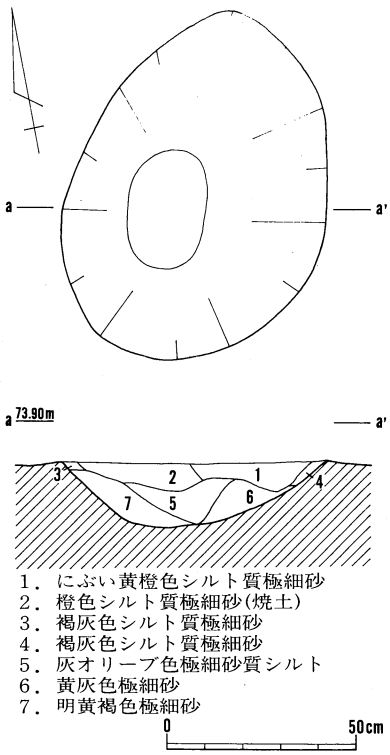
土壙１（第９図）

調査地区の南西端で２基の土壙が検出されたが、その内の北側のものを土壙１とした。平面形状は不整円形を呈しており、長軸約96cm・短軸約79cm・深さ約17cmを測る。埋土には炭が混じり、上面は火を受けて赤化していたことから、住居内や屋外の炉址とも考えられるが、付近に住居に伴う柱穴は存在しない。

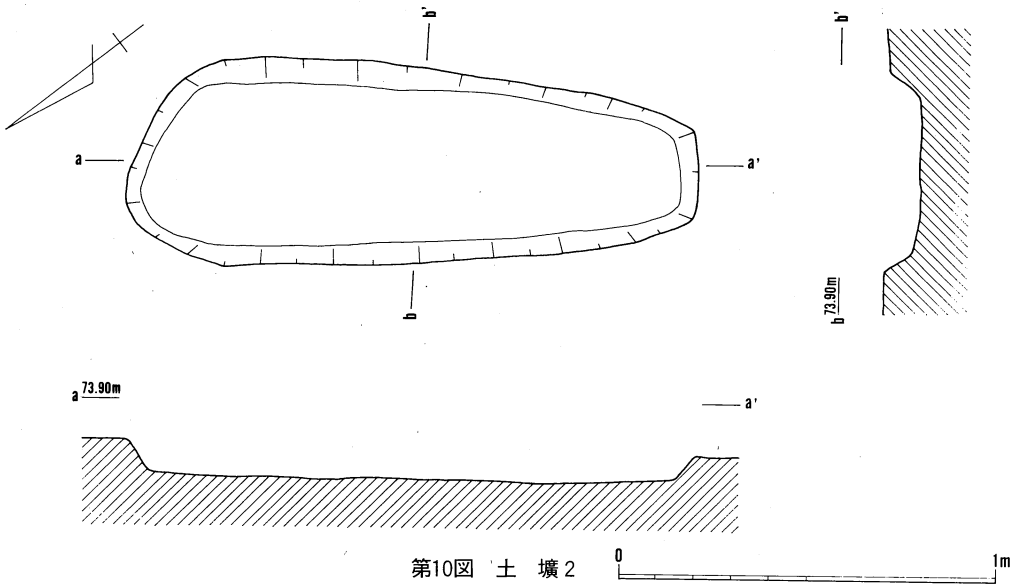
埋土からは弥生土器の小片が出土しているが、図化できず、時期の判断もできない。

土壙２（第10図）

土壙１の南側に位置する土壙で、平面形状は東西に長い隅丸方形を呈する。長さは約1.5mで、巾は北半が約55cm、南半が約35cmを測り、北半の巾が広くなっている。深さは約９cmであった。形状から土壙墓とも



第９図　土　壙１



第10図　土　壙２

考えられるが、埋土や内部からの遺物の出土はなかった。

溝１（第11図、図版第三上）

調査区のほぼ中央付近で検出した溝で、確認調査の際に検出した溝である。地形的に見て、北から南に向かって流れていたものと考えられる。上面の巾は約2.9m、深さは約60cmを測る。肩は両側とも急激に落ち込んでおり、人工の溝といった感を受ける。溝の底は西側が２段で落ちているのに対し、東側は３段となっている。土層の堆積状況には、大きく２度の流れが認められ、東側の段は旧流路の底にあたり、１度掘り直しされている状況が見られる。新しい流路の巾は約2.2mであるが、旧流路の巾は西肩が掘削されてしまっているためはっきりせず、約1.2m以上、2.9m以下の範囲にあったものと思われる。また溝東肩の南半部分ではオーバーフローした流水によって、付近が土壙状に削り取られている。

埋土はシルト質細砂～極細砂が主として堆積しているが、旧流路の底にはシルト混じりの中・細砂が堆積しており、流れがあったことが窺える。

下層からは弥生土器片が、上層からは古墳時代に属すると思われる須恵器片が出土している。

溝２（第11図、図版第三上）

溝１の西側の巾約4.9m、深さ約1.05m、走行方向を約Ｎ37°Ｅとする溝である。調査区の東端では溝１と、切りあっており、溝１よりも古い溝である。掘り方は２段に掘られ、底は中央が低くなっている。

埋土は溝の底から自然に堆積しており、溝１のような掘り直しの痕跡は認められなかった。最下層には粗砂～５cm大の礫が堆積しており、流れは比較的速かったものと思われる。この上層はシルト質極細砂あるいはシルト質の細砂が堆積していた。

遺物は下層から弥生土器（18）が出土し、溝西端の下層からも弥生土器がまとまって出土したが、完形には復元できず、口縁部等もなかったことから、図化はできなかった。中層からも弥生土器（19～24）が出土している。

溝３（第11図、図版第三上）

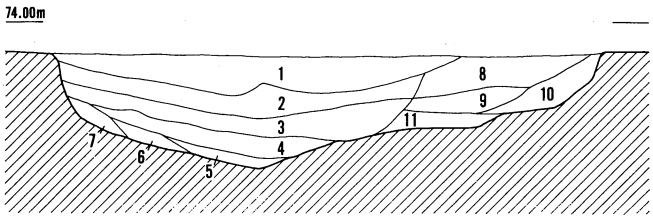
溝２の西側に位置し、溝２に並行する溝で、走行方向はＮ44°Ｅを測る、巾約1.15m・深さ約80cmの溝である。全体としてシルト質の細砂が堆積しており、自然の堆積状況と思われる。流れは余り速くなかったようである。断面観察では溝２より新しいことが窺えたが、溝１との前後関係は不明である。遺物の出土は全く無かった。

溝４（第11図）

調査区の最も北に位置する遺構で、ほぼ南北に走る、巾約１ｍ・深さ約43cmの溝である。走行方向が他の溝とは大きく異なっているが、土層の堆積状況から溝１・２よりは新しい溝であることが判明している。溝３同様遺物は全く出土していない。

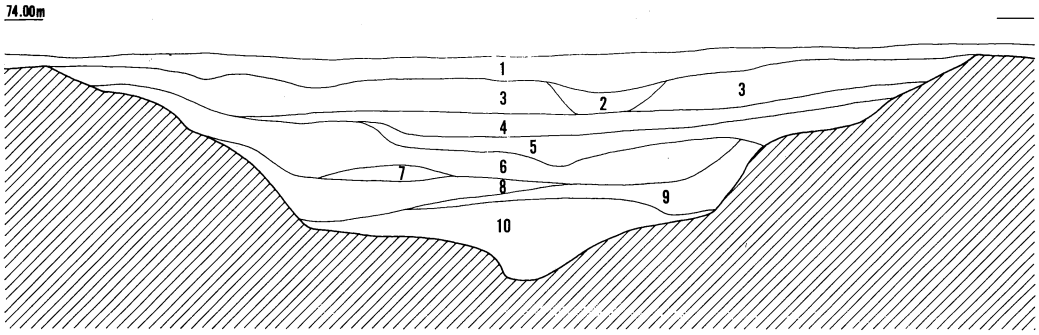
また南地区の建物址３とはほぼ同じ方向性を持ち、関連があるのかもしれない。

溝1

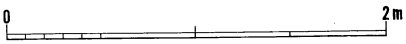


1 灰白色シルト質極細砂
2 明褐色シルト質細砂
3 灰色シルト質極細砂
4 灰白色シルト質極細砂
5 灰色シルト質細砂
6 灰色シルト質細砂
7 灰色極細砂質シルト
8 褐色シルト質極細砂
9 暗褐色極細砂質シルト
10灰色シルト
11灰色シルト混り中・細砂

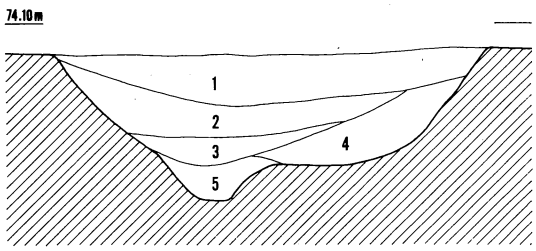
溝2



1 黄褐色シルト質細砂
2 黄褐色シルト混り中砂
3 暗褐色中砂混りシルト
4 褐灰色シルト質極細砂
5 黄灰色シルト混り細砂
6 灰色シルト
7 灰色細砂
8 灰色細砂質シルト
9 にぶい黄褐色細砂質シルト
10灰色砂礫

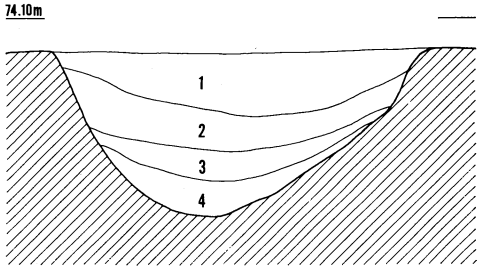


溝3



1 明黄褐色シルト質極細砂
2 明黄褐色シルト質極細砂
3 灰白色極細砂質シルト
4 褐灰色シルト混り中砂
5 灰白色シルト質細砂

溝4



1 明黄褐色シルト質細砂
2 黄灰色シルト質極細砂
3 灰白色細砂
4 灰白色極細砂質シルト

第11図　溝1～4土層断面図

第３節　南地区の遺構

遺構検出面は北半では褐色シルト質極細砂の上面であったが、南半は調査区北側からの堆積土上面となっており、断面観察では８層の上面となっている。これらの層中からは遺物・遺構は認められず、下層にも遺構は存在しない。

また遺構検出面は北から南に緩く傾斜し、北半は工場に伴う排水路や工場造成以前の撹乱を受け、建物址等の遺構が消失した部分が認められる。

その中で、検出した遺構には掘立柱建物址２棟と柱穴群・溝があり、他に土壙が１基存在するが、形状から人工のものとは考えにくいものである。これらの遺構は大きく北・中央・南の３群に分かれて検出されている。

最も北側の群は溝と柱穴群で構成される。溝（溝５）は建物址１・２と同方向のもので、その南側には柱穴群が認められた。柱穴群の中には柱穴４個が溝５に平行し、方向をＮ50°Ｅの、建物址１・２と同じ方向性を持つ柱穴列として捉えられたが、この柱穴列に並行する柱穴列が認められないことから、建物址としては捉えることができなかった。したがって柵列とした方がよいのかもしれないが、ただ北側の現水路によって北桁行の柱穴列が消失している可能性もあり、本来は建物址であった可能性もあることから、断定は避けた。柱間は西から0.6ｍ、2.2ｍ、2.6 ｍであり、東側は調査区外に延びるものと思われる。

中央の遺構群は少数の柱穴群で、その中に規則的な配置を持つものが認められ、建物址と捉えられた（建物址２）。この建物址以外に５個の柱穴が存在し、南北方向に３個並んでいるようであるが、東側が調査区外であり、建物址かどうかは不明である。

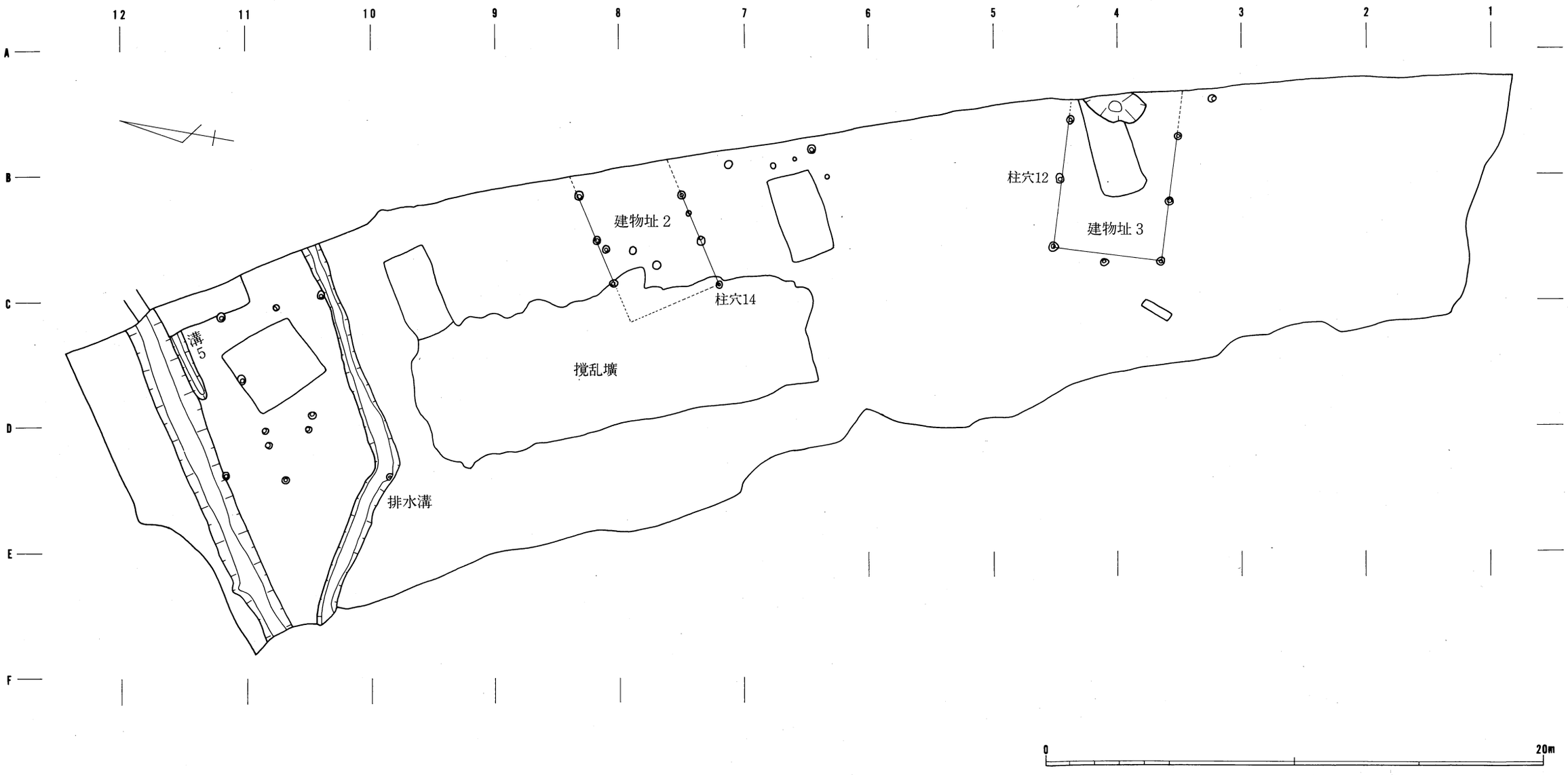
南端の遺構群は、規則性を持って「コ」の字形に配置された柱穴群だけで、容易に建物址（建物址３）を捉えることができた。

建物址２（第13図、図版第四下）

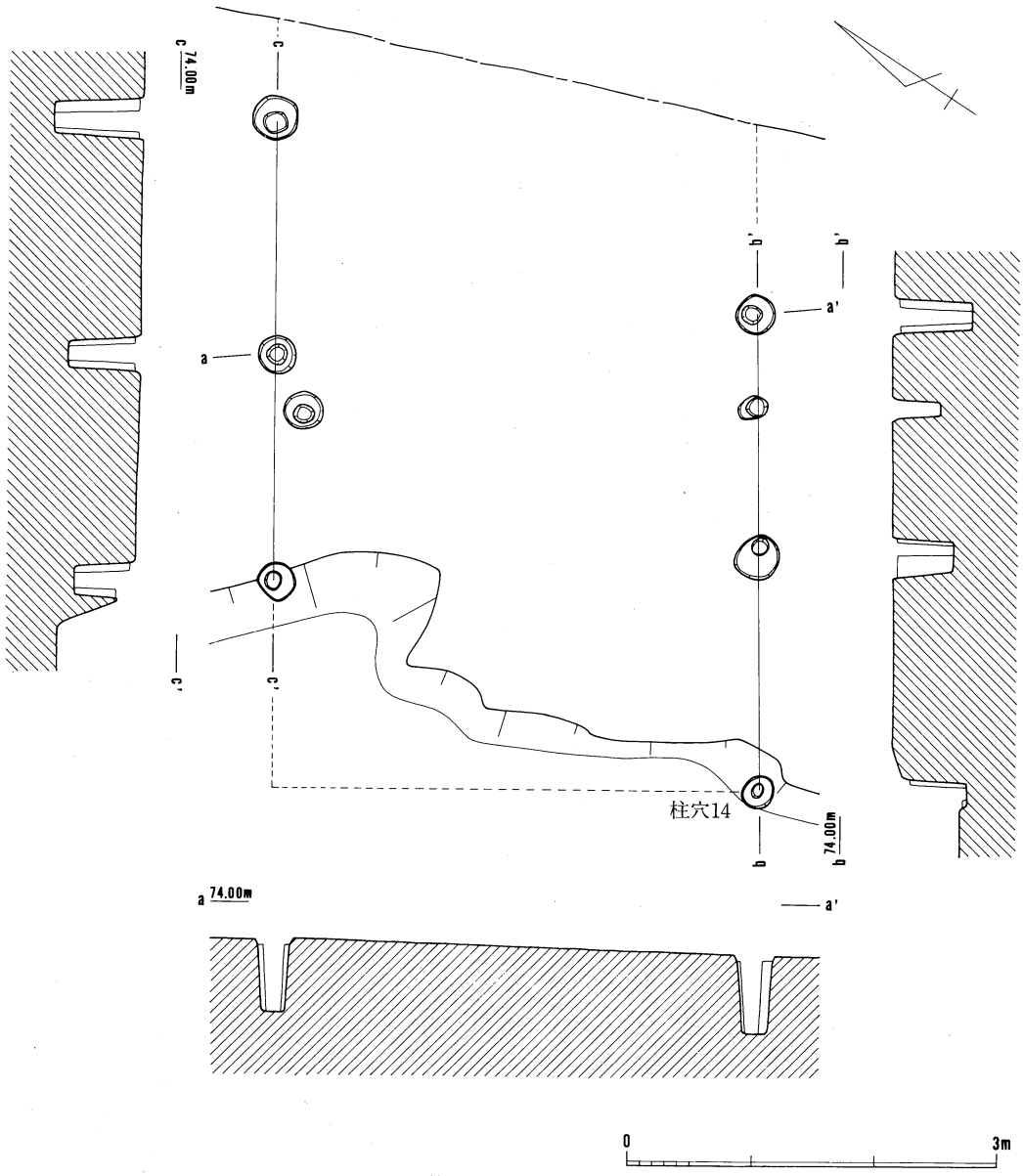
調査区中央部に存在し、西端は撹乱を受けている。東西方向は３個ずつ柱穴が遺存しており、北列の中央の柱穴と南列の東端柱穴とが対応するため、桁行は３間以上である。西端は撹乱を受けて不明であるが、梁方向が約3.8ｍと広く、梁行２間か、１間で棟持柱が存在する構造になるものと思われるが、時期的にも明確ではなく、どちらになるかは断定できない。

棟方位はＮ49°Ｅであり、柱間は1.8～２ｍで、掘り方の径は24～38㎝、柱痕の径は10～16㎝で、遺存良好な柱穴は深さが49～63㎝と深いものが多い。建物址として組み合うものの他に２個の柱穴が存在し、建て替えの可能性も考えられる。

各柱穴から遺物が少量出土し、柱穴14を除いては弥生土器の破片である。柱穴14からは弥生土器の小片とともに、須恵器壷の頸部片が出土している。



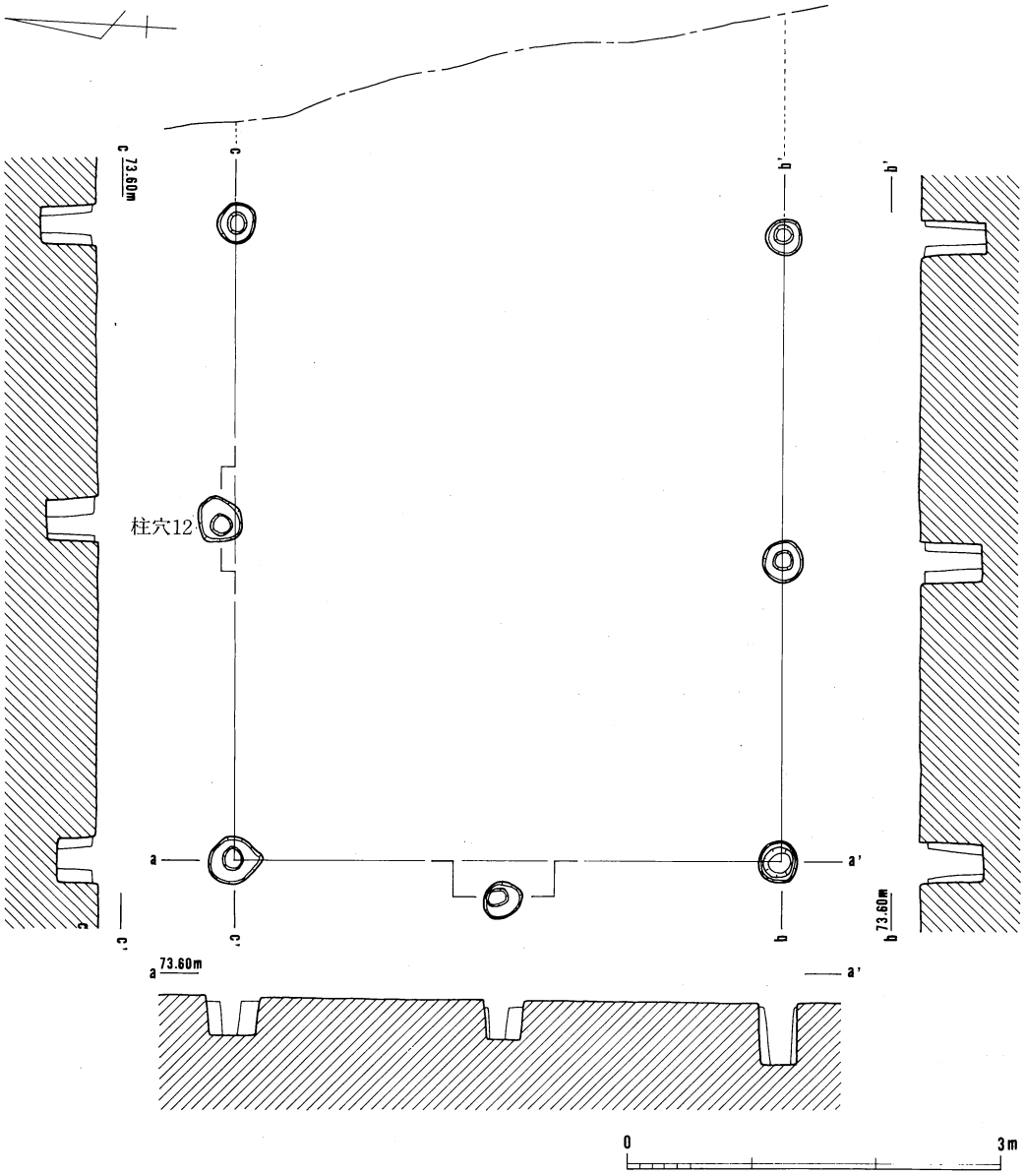
第12図　南地区全体図



第13図　建物址２

建物址３（第14図、図版第五上）

調査区南部で検出した棟方向をＮ89°Ｅとした東西棟の建物址である。桁行は２間存在するが、東端の梁行には中央に柱穴が無く、東端の柱穴から調査区内の桁行柱間を延長すると調査区外となり、桁行がさらに東に延びている可能性が高い。したがって桁行の規模は２間以上となる。柱間は 2.4～2.6ｍを測る。梁行は西妻の中央に柱穴が存在し、２間のように見えるが、中央の柱はやや外側にずれて存在することから棟持柱と考えられる。梁間は4.4ｍである。



第14図　建物址３

柱穴掘り方の径は30～38cm、柱痕の径は16～24cmで、遺存良好な柱穴の検出面からの深さは32～52cmであり、柱穴埋土は灰黄褐色と黒褐色の極細砂である。

北桁行中央の柱穴12の柱痕部分から台付鉢の口縁部(17)が１点出土している。

溝５（図版第五下）

調査区北端で検出したが、上部が削平を受け約７cmの深さしか残っていなかった。長さ2.8m、幅25cmで、埋土は黄褐色シルト質極細砂で、弥生土器の小片が出土したのみである。

第4章　遺　　物

第1節　土　　器

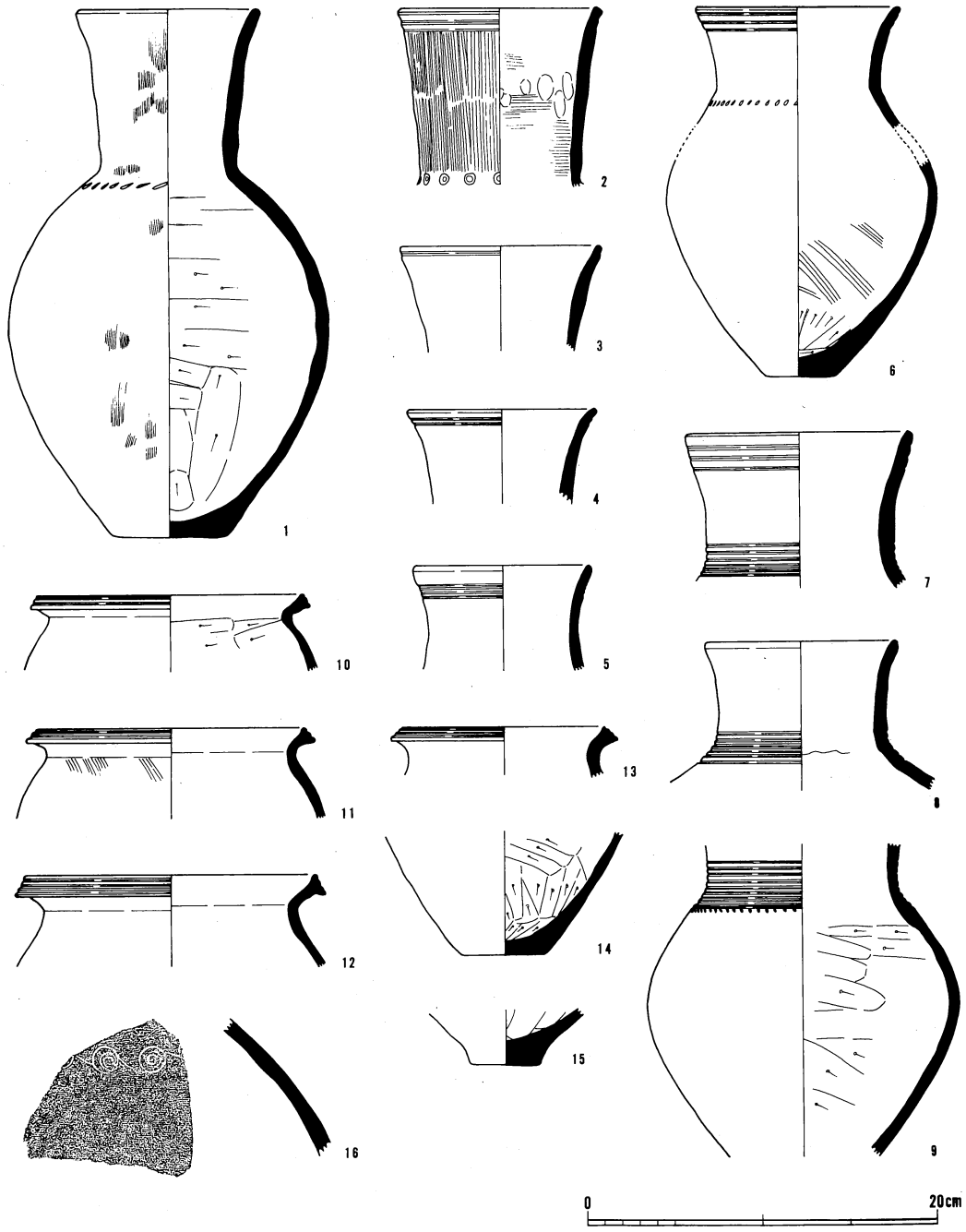
出土した土器には弥生土器・須恵器・土師器・陶器があるが、量的には弥生土器が最も多く、次いで須恵器が多い。ただ弥生土器以外は小片であり、図示し得たのは弥生土器のみである。

建物址1　出土土器（第15図、図版第六・第七上）

長頸壷や直口壷、甕、底部及び壷の体部破片に限られ、高杯や鉢等は出土していない。

（1・2）は長頸壷である。(1) は口縁部から底部まで帯状に残存し、図上では完形品となる。口径10.2cm・器高30.4cm・体部最大径18.4cmで、胎土にはチャートの小粒を多く含み、褐灰色（7.5YR6/1）を呈する。口縁端部は丸く、体部外面は刷毛、内面は篦削りで、外面頸部屈曲部分に刺突文を施す。(2) は口径11cmで、褐灰色（7.5YR4/1）を呈する。口縁上端部は面を持ち、外面に2条の凹線を施している。外面は刷毛調整、内面は横方向の刷毛で、指押さえ痕が残る。頸部屈曲部分に円形の刺突文を施している。（3～9）は直口壷で、(9) は口縁部を欠失している。(3～8) は口縁部が外反し、端部を丸く収めたものである。凹線文を口縁端部付近に施すもの（3～6）、頸部に施すもの (8)、口頸部の両方に施すもの (7) がある。口縁部に施す凹線文の条数は1条から3条まであり、頸部については6条と9条がある。頸部には米粒形の刺突文を施すもの（6･9）がある。(3) は口径11.4cmで、色調は灰白色（2.5Y8/2）を呈し、胎土にはほとんど砂粒を含まない。調整は篦磨きで、にぶい橙色（2.5YR6/4）の化粧土を塗っている。(4) は口径10.8cmで、色調は淡橙色（5YR8/3）を呈し、胎土にはチャート粒を含んでいる。(5) は口径10cmで、色調は内面の一部分が二次焼成を受けて赤橙色（10R6/6）に変色しているが、他の部分は灰白色（2.5YR8/2）を呈する。器表剥離が著しいため調整痕は不明である。(6) は口径11.6cm、体部最大径16cmで、肩部を欠失するが、推定器高は21.3cmを測る。色調は灰白色（2.5Y8/2）を呈し、胎土には1～3㎜のチャート粒を含む。体部内面は粗い刷毛で、底部付近は篦削り、体部外面の下端では篦磨きの痕跡が残っている。(7) は口径12.8cmで、色調は表面が灰白色（2.5Y8/1)、断面が暗灰色（N3/）のサンドイッチ状となっている。口縁端部のみヨコナデ調整が残る。(8) は口径10.8cmで、表面には (3) と同様、淡赤橙色（2.5YR7/3）の化粧土を塗り、ヨコナデ調整を行っている。(9) は体部最大径18cmで、胎土にはチャート粒を含み、にぶい橙色（5YR6/3）を呈する土器である。外面は縦方向の篦磨き、内面は横方向の篦削りである。文様意匠としては吉備地方でよく見かけられるものである。

甕は口縁部が「く」の字状に外反し、端部を拡張し、端面に凹線文を施すもので、体部の肩があまり張らないものと思われる。口縁端部は拡張の小さいもの (10) から大きいもの (12) まで3点あり、(10・11) は2条、(12) は3条の凹線文を施している。体部内面は篦削り調整



第15図　建物址１　出土土器

である。(13) は小型の甕で、形態的には (11) に類似している。端部には3条の凹線文を施す。(10) は口径15.2cmで、胎土にはチャートを含み、灰白色 (10YR7/1) を呈するが、外面は部分的に二次焼成を受けてにぶい赤褐色 (7.5Y5/3) に変色している。外面の調整は縦刷毛である。(11) は口径15.2cmで、胎土には細かい黒色粒を含み、灰褐色 (7.5YR5/2) を呈する。調整は外面が刷毛調整で、口縁部の張り出し部分以下に煤が付着している。(12) は口径16.6cmと最も大きく、胎土に石英やチャート粒を多く含む。色調は表面が灰白色 (2.5Y8/1)、断面が灰色 (N4/) のサンドイッチ状を呈する土器である。口縁～頸部の調整は内外面ともヨコナデである。(13) は口径11.6cmで、胎土に角張ったチャートを多く含み、にぶい赤褐色 (5YR5/3) を呈する。(14・15) は底部である。(14) は底径4.9cmの突出しない平底で、色調はにぶい橙色 (7.5YR7/4) である。内面は篦削り、外面は板ナデ調整で、壷の底部であろう。(15) は底径4cmの突出ぎみの平底で、色調はにぶい橙色 (7.5YR6/4) を呈する。調整は内面がナデ調整で、甕の可能性が高い。

(16) は壷肩部の破片で、大型の広口壷になると思われる。同一個体と見られる破片は他にも出土しているが、接合できなかった。胎土には角閃石・金雲母を含み、いわゆるチョコレート色 (にぶい赤褐色5YR4/4) を呈する土器である。肩部には3重に竹管文を施し、篦描きでつないだ連続同心円文のスタンプ文が施され、連続同心円文の上部には櫛描き直線文の一部が認められる。管見によれば、同心円のつなぎかたは、同心円の下から右隣の同心円の上へつなぐものがほとんどで、反対につなぐものは本例を含めて24例中2例にすぎない。胎土・色調等から、河内方面からの搬入品の可能性が高い。

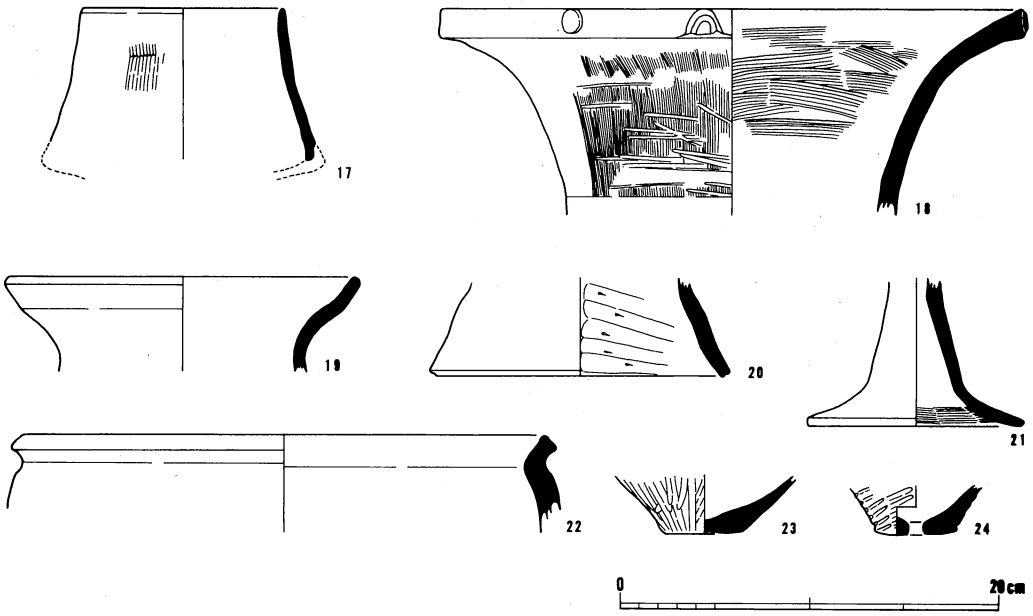
建物址1出土の土器類には、壷の口頸部や、甕の口縁部に凹線文が施されるという特徴が見られる。これは太子町川島遺跡や姫路市極田遺跡等の播磨の中期末の土器に見られる特徴である。しかし中期末のものは、壷の口縁端部が厚みや面を持つのに対し、建物址1から出土した土器類では、壷類は口縁端部が薄く、丸く仕上げられる。甕も体部内面の調整は川島例等では刷毛調整であるのに対し、全て篦削り調整である。これら壷の口縁端部を丸くおさめたり、甕の内面を篦削りする技法は後期の特徴である。ただ壷体部の最大径が体部中位以上にあることや口頸部に凹線文を施す点、甕口縁部を拡張し凹線文を施す点等から、弥生後期でも初頭頃に位置づけられる一群と言えよう。

建物址3出土土器（第16図、図版第七下）

台付鉢 (17) は建物址3の柱穴12から出土したもので、口径は10.6cm、色調は灰白色 (7.5Y8/11) を呈する。底径が口径を上回り、脚台が付くものであろう。外面は篦磨き調整である。瀬戸内地方では後期後半以降に出現するものである。

溝2出土土器（第16図、図版第七下）

(18～24) は北地区の溝2出土のもので、各器種がある。



第16図　建物址３・溝２　出土土器

壷は２点図示しているが、(18) は口径30.8cmの大型広口壷の口縁部で、あまり肥厚しない端部に円形浮文と逆「U」字形の浮文を貼り付けている。内外面とも刷毛調整である。外面は刷毛の後、横方向の篦磨きを加えている。(19) は口径18.4cmの受け口状になった口縁部で、色調は淡橙色 (5YR8/3) を呈する。外面上半はヨコナデ、下半は篦磨き調整である。

(20)は脚部径15.2cmで、表面は灰白色 (2.5Y8/1)、断面は黒色 (N2/) を呈し、器台か脚台と考えられる土器である。下端部中央が凹み、調整は外面が粗いヨコナデ、内面が篦削りである。(21) は脚部径が11.4cmの高杯の脚部で、色調は淡橙色 (5YR8/3) を呈する。中空で薄手の造りの脚部で、屈曲はやや急である。調整は脚柱部外面が縦方向の篦削りで、裾部はナデ、内面は脚柱部が横方向の篦削り、裾部が横方向の刷毛である。

(22) は口径27.6cmと大型のもので、胎土に黒色微粒を含み、色調は灰白色 (2.5Y7/1) を呈する。甕あるいは鉢の口縁部と思われ、口縁部は体部から「く」の字状に外反し、端部は上下に少し拡張する。残存している部分の調整は全てヨコナデである。

(23)・(24) はほとんど突出しない平底で、(23) は底径4.3cmで、色調は灰白色 (5Y7/１) を呈する。外面を篦磨き調整していることから、鉢や壷の可能性が高い。(24) は 底径4.3cmで、色調は灰白色 (5Y8/1) を呈する。外面は叩き調整で、有孔鉢と思われる。

下層出土の広口壷 (18) と (22) については建物址２出土土器と同時期と考えられるが、中層出土の壷 (19)・高杯 (21) 等は、弥生後期でも比較的新しい時期に属するものと思われる。

第5章　ま　と　め

第1節　ま　と　め

今回の調査は満願寺川の災害復旧助成工事に伴って実施したもので、前述の通り、南・北地区合わせて、建物址3棟・柵1列・土壙2基・溝5本・柱穴群が検出されている。これらの遺構は調査区の北端付近に溝が、中央から南半に建物址等が配置されている。ただ遺跡を覆う包含層は存在せず、出土遺物は極めて少ない上、検出された遺構が建物址等ということもあって、遺構の時期を断定することは困難であった。そこで単に出土遺物の点から、遺構の時期幅を捉え、建物址の性格を考え、そこにおける問題点と今後の課題といったものを最後に記述して、まとめとしたい。

1．遺構の時期

a．出土遺物から見た時期

今回の調査では、遺構内からは弥生時代後期初頭から後期後半の弥生土器と古墳時代後期～平安時代前半までの須恵器が出土し、遺構面からは弥生土器と平安時代前半までの須恵器が、撹乱壙内からは弥生土器と古墳時代後期以降の須恵器が出土している。ただ量的に最も多く見られるのは弥生土器であり、図化できたものは全て弥生土器であることなど、出土遺物の点から本遺跡は弥生時代後期を中心とする遺跡と言えよう。

弥生土器を出土する遺構には建物址1・3、溝2・5、土壙1・2、柵列1等があり、建物址1は柱穴2から出土した土器は弥生時代後期初頭に位置付けられるもので、吉備や河内の影響が見られる。他の柱穴からは小片ではあるが、弥生土器だけが出土しており、建物址1の建築時期は弥生時代後期初頭前後に考えられる。建物址3も柱穴12から後期後半の弥生土器が出土し、他の柱穴からも弥生土器だけが出土している。したがって建物址1よりやや後出して、建築時期は弥生時代後期後半に求められる。溝2は下層から弥生時代後期初頭の、中層から後期後半の弥生土器が出土していることから、掘削時期は弥生時代後期初頭頃と見てよいものと考えられる。他の土壙1・2、柵列1等も小片であるが弥生土器の小片が出土しており、消極的には須恵器が認められないことから、弥生時代のものと見てよいものと思われる。

建物址2では他の柱穴から出土する遺物が、小片ながら弥生土器と認められるのに対し、柱穴14からは古墳時代後期以降平安時代前半までのものと思われる須恵器が1点出土している。したがって新しい遺物の示す年代をとって平安時代前半までのものと見ることができる。ただ柱穴14は後世の撹乱を受けており、須恵器はその際に混じり込んだものと理解して、他の建物址と同様に、弥生時代後期の中に位置付けすることも可能ではある。しかし今回は建物址2の時期は敢えて断定せず、弥生時代後期から平安時代前半までの中に考えておく。

溝１は古墳時代後期の須恵器が上層から出土していることから、埋没年代は古墳時代後期であり、溝２との関係から掘削時期は弥生時代後期以降古墳時代後期までとすることができる。溝３・４については出土遺物が無く、遺物の点から時期を決定することは出来ない。

以上のように出土遺物からすれば、建物址１・溝２が弥生時代後期初頭のほぼ同じ時期に、建物址３がやや遅れて、弥生時代後期後半に位置付けられるもので、弥生土器を出土する他の土壙・柵等も弥生時代後期の中に位置付けすることができる。溝１は弥生時代後期後半以降古墳時代後期までに位置付けられるが、建物址２は弥生時代後期から平安時代前半までの、かなり長い幅を持たせた時期を与えて置きたい。

ｂ．遺構の方向性

以上土器の示す年代から、今回検出した遺構の時期を見たが、検出された主な遺構が建物址で、出土する遺物が必ずしも建物址等の建築時期を示していない可能性も残る。そこで、ここでは同方向の建物址・柵等の遺構は同じ時期とする立場で、遺構の時期を考えて見たい。

今回検出した遺構は、その遺構の持つ方向性によって３群に分けられる。まず①のグループは建物址１・２、溝５で、棟方位や走行方向をＮ50°Ｅ前後に置くものである。遺物の点からは、建物址１は弥生時代後期初頭、溝５は弥生時代後期の中に位置付けられる遺構である。それに対し、建物址２は古く見た場合は弥生時代後期の中に、新しく考えた場合は平安時代前半まで時期が下がるもので、遺物からは建築時期の特定はできていない。

またこのグループの示すＮ50°Ｅ前後という方向性は、在田盆地に残る条里形地割りとほぼ同方向であり、現在の地割りとほぼ一致する。現に第５図では調査以前の溝や、調査区周辺の地割りと一致している。現在の地割りは②・③のグループの存在から弥生時代から引き継がれるもので無いことは明白であり、方向性の点からだけではこのグループの遺構は現地割りが成立して以後、ないしは古くても現地割りの成立直前と見られる。したがって遺物から見た時期とは異なって、建物址２を新しく捉えた場合の平安時代前半という時期に妥当性が出てくる。

②のグループは走行方向や棟方位をほぼ正方位に置く遺構群で、建物址３・柵１・溝４がある。建物址３の柱穴埋土から後期後半の弥生土器が出土している。ただ溝４は土層関係から古墳時代後期の須恵器を出土した溝１よりは新しく位置付けられるものである。したがってこのグループは古墳時代後期以降とせざるを得ず、このグループは①のグループより先行することになる。

③のグループは溝１～３のＮ30～40°Ｅに走行方向を置くもので、遺物の点から溝２はほぼ弥生時代後期初頭から後半を与えている。溝１は溝２の埋没以後に掘削され、ほぼ古墳時代後期には埋没するものとした。また溝１・２はやや規模は違うものの、似通った様相を示し、年代的にも溝２から溝１への移行が考えられることから、ほぼ同じ目的を持って掘削されたものと考えられる。また両溝の東端は切り合い、溝底はともに接近して行くことから、本来一本の

溝である可能性が高い。溝３は遺物の出土が無く、時期的には不明であるが、切り合い関係や土層関係から溝１・２よりは新しく、溝４よりも古い時期に設けられたことが判明している。したがってこの群は古墳時代後期以降、溝４が設けられる以前と推定でき、矛盾は見られない。

以上のように今回検出した遺構の方向性からは、遺物の示す年代とは異なり、①が平安時代前半頃、②が古墳時代後期以降平安時代前半まで、③が弥生時代後期初頭から古墳時代後期以後②の遺構成立以前といった順となり、遺物から見た時期とは大きく違ってくる。

このように出土土器から見た場合と、遺構の持つ方向性から見た場合では、溝を除く、建物址等の遺構の年代は異なってくる。ただ遺物による年代決定というのが考古学的な手法であり、今回検出した遺構は遺物の示す年代を優先させて考えておきたい。つまり方向性の問題は残るが、建物址１・３、柵列１、土壙１・２、溝２・５等は弥生時代後期初頭から後半に、溝１は古墳時代後期までに、建物址３は弥生時代後期から平安時代前半までとしておきたい。

２．建物址の性格

検出された３棟の建物址はいずれも桁行の規模は、建物址の端が調査区外になることから、不明である。したがって建物址の性格を断定することは困難であるが、検出された部分での構造からその性格を考えて見たい。まず３棟の建物址の梁行は、建物址１が１間約3.3m、建物址２が3.8m、建物址３が4.4mを測り、建物址２は撹乱のため梁行の間数は不明である。建物址３は建築時期によって梁行の間数も変わってくるが、弥生時代とすれば、梁行は１間で、妻側からはみ出した形で棟持ち柱を持つ構造になる。こうした構造の建物址は畿内地方から中国地方に分布するが、中国地方のものは棟持ち柱が大きく外側にはみ出して設けられている。本遺跡のように柱幾本分という僅かにはみ出した構造のものは畿内地方に見られるものである。両地域ともその性格は、梁行が広いという構造的な弱さから平地式住居として捉えられている。建物址２は構造的にははっきりしないが、時期的に新しいものとすれば梁行は長さから見て２間と考えられる。古く見て、梁行１間とすれば、梁行が広く、建物址１と同様の構造が考えられる。いずれにしてもいわゆる掘立柱建物址である。

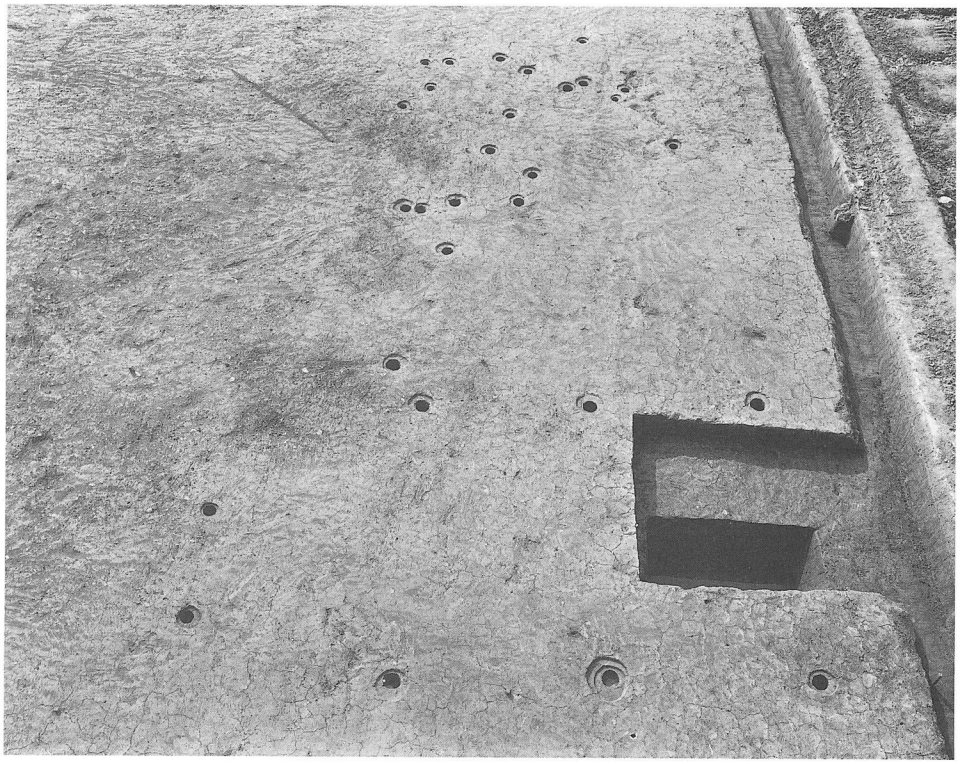
ただ建物址１は他の建物址よりは梁行が短く、西に梯子等に伴う柱穴が想定されることから、高床式の構造が想定され、構造的には遺物の示す弥生時代の倉庫として捉えられる。

３．今後の問題点

以上のように今回検出された遺構は倉庫と思われる建物址１棟と住居と思われる建物址２棟、柵１列、土壙２基、溝５本等であり、建物址１・３、土壙１・２、溝２・５等は弥生時代後期の中に、溝２は古墳時代後期以前に、建物址２は弥生時代後期以降平安時代前半までに位置付けた。ただこの年代は出土土器から見たものであり、方向性の問題、特に周辺の条里形地割りと①とした遺構の持つ方向性の一致は問題が残る。建物址の時期・性格等は集落の構成や構造、集落存続時期の中で決定されるべきもので、今後行われる予定の調査に期する所は大きい。

図版第一　遺跡航空写真

上、北地区全景

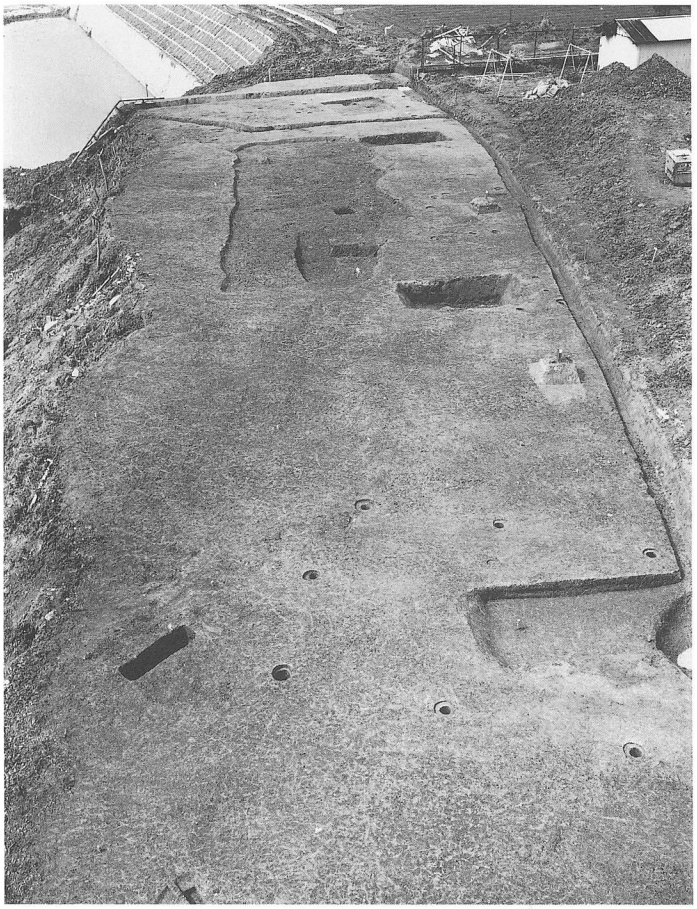


下）建物址 1

上）溝１～３

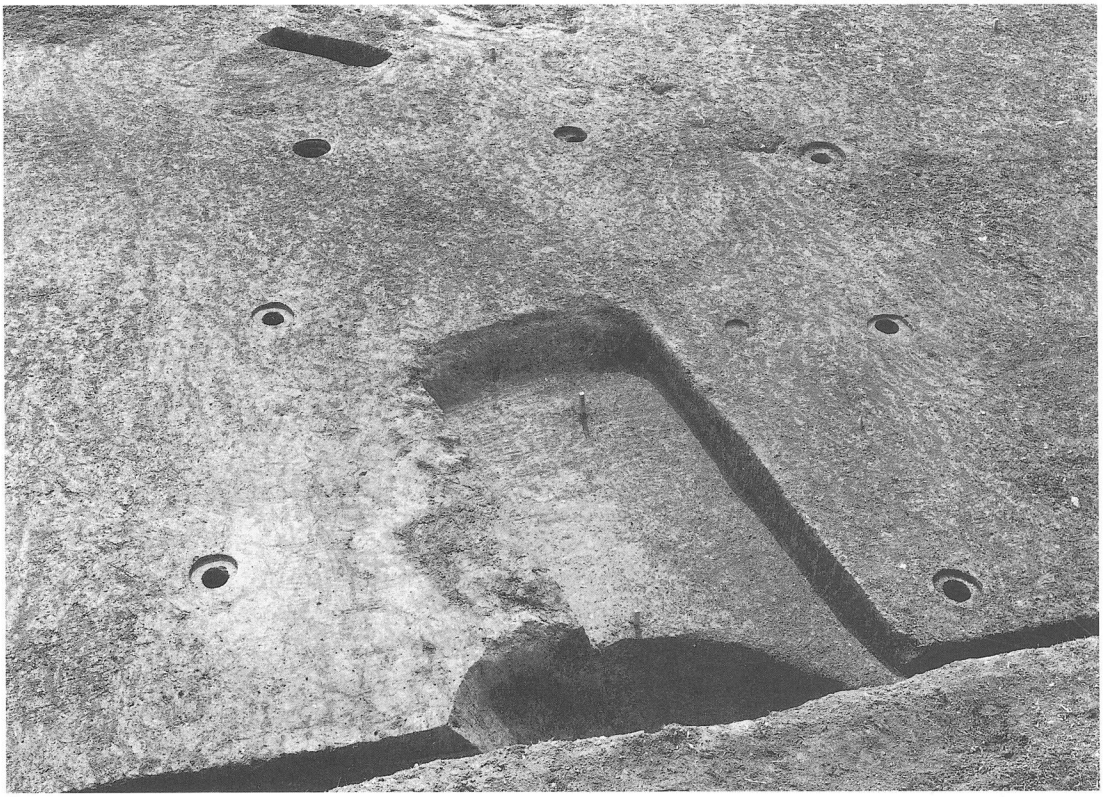
下）溝２　土層堆積状況

図版第四　遺構



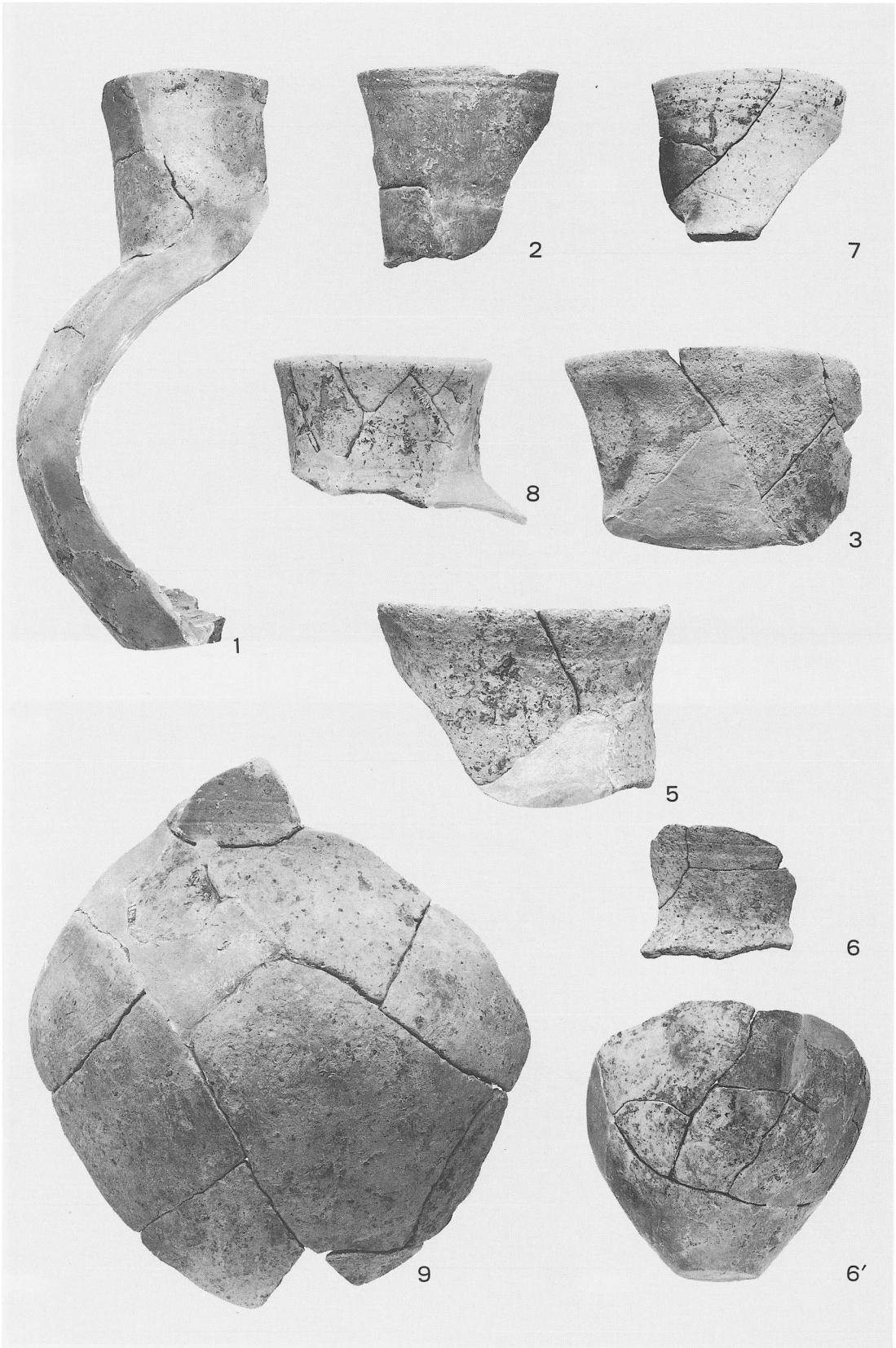
上、南地区全景

下）建物址 2

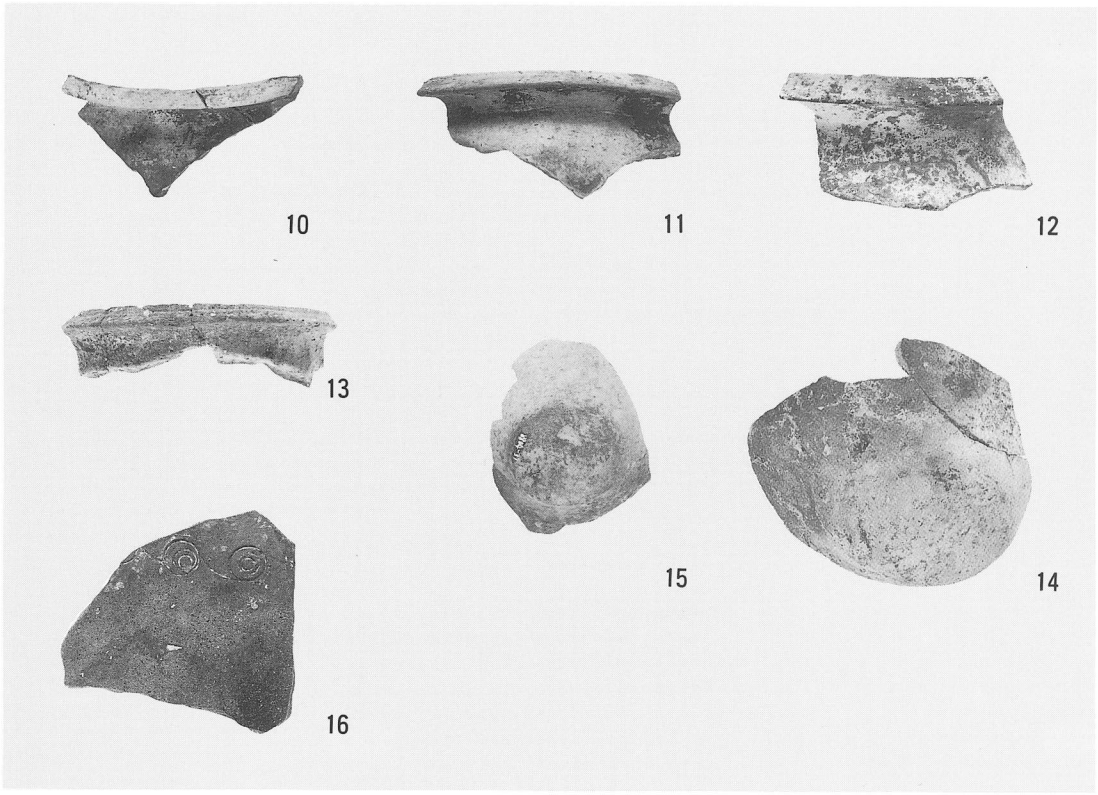


上）建物址 3

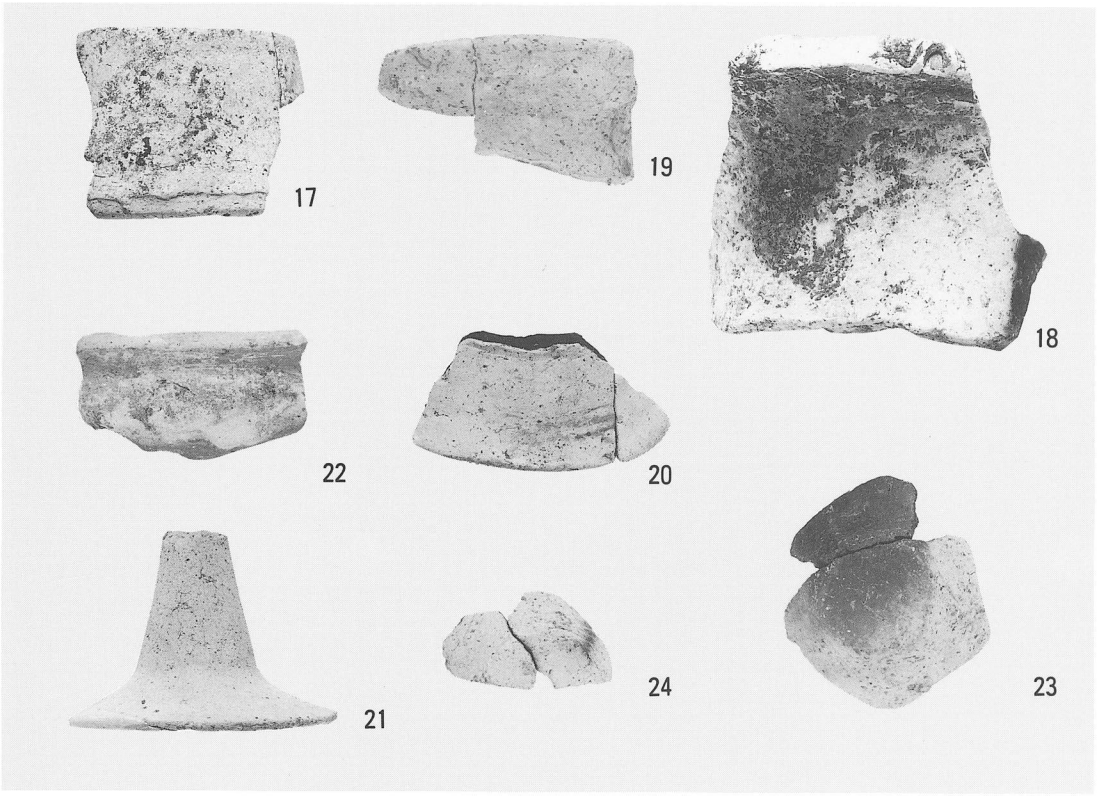
下）南地区北端遺構群



建物址 1 出土土器



上）建物址１　出土土器



下）建物址３・溝２　出土土器

兵庫県文化財調査報告書　第85冊
長 礒 遺 跡
平成３年３月31日　発行
編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1－5
TEL（078）531－7011
発　行　兵　庫　県　教　育　委　員　会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10－1
TEL　（078）341－7711
印　刷　株　式　会　社　旭　成　社
〒650 神戸市中央区二宮町1丁目2番7号
TEL（078）5800㈹